

丸山眞男の「古層論」と
加藤周一の「土着世界観」

田口富久治

同時代社

葦牙

ASHIKABI 2002.8 28

ヨシユカ・バクソヴァーは、ゲシュタポに逮捕される危険から逃れ、ブラハで地下生活に入ったものの、転々としていたユリウス・フチークに、夫のヴァーツラフ・バクザ、異父妹のリーダ・ブラハと一緒に、三間しかない自宅の一隅を提供して貰い、自分たちは一間の生活をしたという、チェコの勇気があり、犠牲的精神に富んだ女性である。



丸山眞男の「古層論」と加藤周一の「土着世界観」 □ 田口富久治

文学から見たロシア革命とソ連崩壊 □ 川端香男里

石堂清倫さんに一九四〇年代前後を聞く □ 聞き手 横手二彦

小説 茉莉花の宿 □ 牧 桐郎

フチーク逮捕の周辺

ヨシユカ・バクソヴァーの証言

訳・解説 栗栖 健

日本の社会主義運動の現在

加藤 哲郎

〔解題〕

本稿は、二〇〇二年一月二五日―二七日に、北京市郊外泉山庄賓館で行われた、北京大学国際関係学院世界社会主義研究所シンポジウム「冷戦後の世界社会主義運動」に提出された、筆者の外国人ゲスト報告の日本語原文である。

会議の詳しい模様と印象記は、『社会体制と法』第三号（春風社、二〇〇二年五月）所収の拙稿「現代世界の社会主義と民主主義——北京大学国際シンポジウムから見たもの」に掲載されているが、ここでは、筆者の個人ホームページ「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」<http://www.f.fj4u.or.jp/~katote/home.html>で二〇〇二年二月一日に更新・発信した

トップ・ページの一部を以下に収録して、解題にかえたい。

前回更新後、遅ればせながら、本HPの定番中の定番「情報収集センター」内の特別研究室「二〇〇二年の尋ね人」を更新してヴァージョン・アップし、今年の尋ね人を、「木村治三郎⇨カタオカ・ケンタロウ」と白川敏（白髭渡？）こと岡内順三の『ベルリン紅団』に改めて、中国・北京に旅立ちました。北京大学国際関係学院主催の国際シンポジウム「冷戦後世界の社会主義運動」に招かれ、拙著『二〇世紀を超えて——再審される社会主義』（花伝社、二〇〇一年）をもとに、「日本の社会主義運動の現在」を報告してきました。

外国人ゲストは、私とロシアの歴史家ロイ・メドヴェーデ

フ博士とドイツからベルント・インマ氏の三人のみ、中国語を英語通訳付きで聞く会議でしたが、それでも中国の「社会主義市場経済」の進行は、実感することができました。中国訪問は冷戦崩壊後三回目ですが、これまでは上海を見てから北京に入っていたので、どうしても上海に比しての北京の経済的遅れやインフラの未整備が気になりました。今回は初めての北京直行で、数年前に比してぐっと綺麗になり、高層ビルが立ち並ぶ近代都市に変身していました。

空港には「WTO加盟万歳」の旗がはためき、市内には「二〇〇八年北京オリンピックを成功させよう」の巨大な横断幕。かつて目立った毛沢東の写真は本屋や骨董品店の片隅に並ぶばかりで、この国の「テイクオフ」をひしひしと感じます。

国際会議の方は、中国側の出席者が、北京大学はじめ有力大学の国際関係研究者のほか、社会科学院・中央党校イデオロギー幹部等百人近く、私のペーパーは「日本の既存社会主義運動に未来はない」という観点からの報告だったので、はじめは緊張していたのですが、共産党一党支配の続く中国の政治も、大きく変わりつつあるようです。

かの「歴史の審判」(石堂清倫訳「共産主義とは何か」三一書房)のメドヴェージェフ博士をよんで「ソ連崩壊の要因」を研究し始めたこと自体画期的ですが、「社会主義」といって旧来の国際共産主義運動はもっぱら「失敗の教訓」として扱われ、もともと「社会主義と市場経済」を結びつけてきたヨーロッパ社会民主主義の経験、緑の党などを真摯に研究す

る姿勢が、印象的でした。

私の報告は、「社会主義」概念をフランス革命期まで遡って再検討し、「インターネット時代の情報戦」と日本の社会運動に即した「市民運動・NGO・NPOの重要性」を指摘して、特に若手研究者からは大歓迎されました。古参イデオロギー幹部が「レーニンやローザ・ルクセンブルグも社会主義と民主主義の結合の重要性を述べていた」という類の旧来型説明で市場経済化から民主化への共産党主導での「秩序ある移行」を語るのに対し、文化大革命も知らない若い世代が、民主主義の指標は自由選挙と複数政党制だとか、共産党の指導を前提するならば党内「分派」や言論の自由を認めなければ民主主義とはいえない、と率直に語っているのが、新鮮でした。

ただし、「市場経済」が「民主化」を自動的にもたらさずような楽観論も目立ち、私は「二〇世紀日本の教訓」として、市場経済のもとで工業化・都市化が進むことは、階層的・地域的格差の拡大を意味し、政治的民主主義にとってはむしろ新たな困難な課題をもたらすこと、中国が共産党指導下で工業化に成功しても、それは「社会主義の威信回復」につながるものではなく、先進資本主義国ではむしろ、旧ソ連と同じ「社会主義から資本主義へ」の開発独裁型近代化と受けとめられるだけであり、むしろ環境・生態系保護や社会的弱者救済・労働者福祉で特色を示さなければ、西欧社会民主主義への合流も難しいことを、率直に述べました。

ドイツPDS（旧東独地域の民主社会主義党）のインマさんの報告も、私の報告と共通する点が多く、特に「なぜPDSはSPD（社会民主党）に合流しようとしなのか」という質問に、PDSは政党であると同時に社会運動でもあろうとしており、それを保証するために「民主集中制」型の集権的組織を採らず、むしろ党内「分派」を奨励して活性化しようとしている、と述べた時には、若い研究者は眼を輝かせ、古参イデオロギー幹部は渋い表情で、中国でも不可避免になった世代の断絶が印象的でした。

私の報告の柱の一つである「インターネット時代の情報戦」「市民運動・NGO・NPOによる市場経済の暴走への社会的制御」に関連して、北京大学の若手研究者たちからは、ホームページの効用やNGOの政治的意味について、熱心な質問を受けました。メドヴェージェフ博士には、名著『歴史の審判』（邦訳「共産主義とは何か」上下、三一書房、一九七三年）は日本でもいまだに読み継がれているが、その翻訳者であった石堂清倫さんが亡くなられたことを、お知らせしてきました。

一 はじめに——「社会主義」と「共産主義」

「社会主義 Socialism」とは、曖昧で論争的な概念である。私の理解では、それは、フランス革命の「自由・平等・友愛」理念を継承し、とりわけその「平等」理念を「財産共同体」として実現しようという、さまざまな思想および運動の総称

で、もともと一八二〇年代に英語でこの言葉が生まれたときには、まだ「資本主義 Capitalism」という言葉はなかった。

カル・マルクス¹⁾『資本論』と第一インターナショナルの時代に、「社会主義」の担い手としての労働者階級、その運動としての労働組合・労働者政党が「発見」され勃興した。ただし、マルクスが「社会主義」という言葉を肯定的に使ったのはきわめてまれで、自己の理想を「共産主義 Communism」なくし「協同社会 Association」として述べる場合が圧倒的だった。マルクスは、「資本主義」という言葉もほとんど使わず、「資本家社会 kapitalistische Gesellschaft」「資本家的生産様式」という形容詞形がほとんどだった。

しかし、二〇世紀に入ると、「資本主義対社会主義」という体制的対立概念として用いられるようになり、とりわけ一九一七年のロシア革命以後は、「社会主義」とは「共産主義」の低次の段階とされて、レーニンとボリシェビキの系譜を引く共産党の指導するプロレタリア独裁国家・社会体制、生産手段の国有化を基軸とした中央集権的計画経済体制と同義とされてきた。

そのため「社会主義」の運動も、一九世紀には広義の社会主義の一翼であった第二インターナショナル⇨社会民主主義の流れが、二〇世紀には、第三インターナショナル（コミンテルン）⇨共産主義の側から「資本主義国家体制内の改良主義、市場原理を認めた修正主義」として批判・軽蔑され、今日ヨーロッパ連合（EU）内で多数が政権にある社会民主

義政党、社会主義インターナショナルの流れは、「社会主義」
国際共産主義運動から排除されてしまった。^{*3}

これは、二一世紀の今日から見れば「大いなる失敗」^{*4}であ
ったが、二〇世紀の日本においても、「社会主義」とは、主
としてコミンテルン^{II}共産党系の思想・運動、およびソ連や
東欧の「現存した社会主義 Actually existed Socialism」の国
家・経済体制と理解され、受容されてきたので、ここでは「日
本の社会主義運動」を日本共産党を中心としたものとして扱
い、日本の社会民主主義については、副次的にのみ扱うこと
とする。

二 ポスト冷戦期の日本共産党

一九八九年の「ベルリンの壁」崩壊と九一年のソ連解体で、
世界の共産党は、消滅の一途を辿っている。旧来のコミンテ
ルン、コミンフォルムの伝統を引いた国際共産主義運動は、
基本的に消滅した。北欧、イギリス等では共産党が自主解散
し、イタリア共産党は左翼民主党に変身して、社会主義イン
ターナショナルに加盟した。かつての「モスクワの長女」フ
ランス共産党は、スターリン主義的過去を自己批判し生き残
ろうとしているが、三分の二の党員を失い、弱体化した。ア
ジア、ラテンアメリカにはいくつかの共産党が生き残ってい
るが、アフリカでは、ソ連の援助で作られた共産党のほとん
どが消えた。^{*5}

その中で、なぜ発達した資本主義国である日本で、共産党
が生き残り得たのだろうか。これは外国からみると、奇妙な
状況だろう。しかし、これにはいくつかの根拠がある。

第一に、一九六〇年代前半から、日本共産党が、ソ連や中
国の共産党と論争して距離を置き、「自主独立」の姿勢をと
ってきた経緯がある。そして七〇年代のユーロコミュニズム
の時代に、イタリア共産党などと同様、ある程度柔軟な政治
路線で議会や選挙に参入しながら、階級政党から国民政党へ
の転換の準備をしてきた。そのため、日本共産党はソ連や中
国の共産党とは違うというイメージが広がって、一九八九年
の中国天安門事件や東欧革命、九一年ソ連崩壊のショックを、
最小限に留めることができた。

第二に、冷戦崩壊と同時に、日本の政治状況が大きく変わ
った。戦後日本は自由民主党が長期に支配してきたが、冷戦
崩壊後の保守の分裂で政党再編が進み（日本では「五五年体
制の崩壊」という）、一九九四年には、日本社会党が自民党
と連立政権を組んだ。そのさい、それまで「社会主義」をか
かげ野党的政策を貫いてきた日本社会党が、社会民主党と改
称、日米安保条約や自衛隊の容認へと大きく政策転換した。
社会民主主義——社会主義インターナショナル内の最左翼——
に属した日本社会党が、事実上解体した。その中で、かつ
ての日本社会党の支持者の一部（つまり旧来の伝統的革新層、
あるいは日本の特殊な政治環境のもとでの「戦後民主主義」
派、日本国憲法絶対擁護派）が、日本共産党支持へと移った

のである。

数字の上で見れば、一九九六年衆議院選挙（総選挙）で共産党二四議席、比例区選挙七二七万票、得票率一三・一％で、旧日本社会党の左派の一部が残った社会民主党は一一議席、三五五万票、六・四％であった。二〇〇〇年総選挙では共産党が二〇議席、比例区六七二万票、得票率一一・二％に減つて、社民党が一九議席、五六〇万票、九・四％と増えた。一九九八年参議院選挙で、共産党は一五議席、比例区八二〇万票、得票率一四・六％、社民党五議席、四三七万票、七・八％を記録したが、二〇〇一年参議院選挙では、共産党五議席、比例区四三三万票、七・九％、社民党三議席、三六三万票、六・六％まで、両党とも激減した。

これらの数字は、共産党と社民党の票を足しても、冷戦時代の社会党と共産党を加えた票（例えば一九七二年総選挙で、社会党一一四八万票、二一・九％、共産党五七〇万票、一〇・九％、合計一七一八万票、三二・八％）には遠く及ばないから、日本全体の右傾化の中で、かろうじて残っている高年齢の旧左翼・伝統的革新層が、共産党や社民党を支え、時々に票を分けあっているといえる。

第三に、地方政治では、共産党は全国に約二万八千の支部（かつての細胞）があり、自民党より多い四四〇〇人の地方議員（内一三〇〇人が女性）を持ち、無所属を除くと第一党になっている。一〇五の自治体では議会内与党になっている。これは、地域活動に熱心な共産党議員個人への支持であるた

め、かならずしも共産党支持ではなく、ましてや社会主義・共産主義思想への支持には直結しないが、少なくとも社会生活に身近な存在として、国民に定着してきたことを意味する。いわば、地域社会の「護民官」としての共産党である。

第四に、共産党組織の内部では、戦後長い間党の指導を独占してきた宮本顕治が一九九七年に退陣し、不破哲三議長のもと、志位和夫委員長ら若い世代にリーダーシップが移つたことである。この新指導部が、旧来の硬直した組織の在り方を多少とも柔軟にする姿勢に乗り出している。たとえば九〇年代以降、党内抗争やそれによる除名や排除が、少なくとも表面には出なくなった。最高時の一九八〇年四八万人から現在三八万人へと党員数を減らし、機関紙「赤旗」購読者数も最高時一九八二年の三五五万部から現在公称二〇〇万部へと読者を減らしているが、今日の日本共産党は、いわばスリム化して、指導部に忠実な層だけを統合する組織を作り上げて⁶⁶いる。

三 日本共産党の自己矛盾

しかし、以上に述べた存続理由の全てが、実は同時に、日本共産党に自己矛盾と衰退をもたらす要因にもなっている。

第一に、日本の政治状況との関連では、階級政党から国民政党への路線転換に矛盾がある。一九九七年の第二一回党大会では宮本顕治が退陣し、不破哲三に指導権が移ると共に、

二一世紀の早い時期に民主連合政府を樹立すると宣言した。政権に近づくために、西欧の社会民主党が経験したような政策の穏健化・国民化が必須になってきた。二〇〇〇年の第二回党大会規約改正では、「前衛党」や「日本人民」といった旧来のマルクス主義用語・左翼用語を削って、「国民政党」になると公約した。しかしそうすると、大きな支持基盤である旧来の左翼や伝統的革新層からの批判が避けられない問題が出てきた。

政策上は、実際、穏健化・国民化の方向に、舵がきられている。たとえば一九九九年、不破委員長（当時、二〇〇〇年第二二回大会で議長就任）は「暫定政権論」において、日米安保条約の問題は暫定政権下では棚上げにするとし、また国会の首相指名では、二回目の投票で野党第一党の民主党菅直人に投票した。日本が異常事態に陥った時には自衛隊に頼ることもありうることも明言した。

東ティモール問題で民兵に対する多国籍軍の介入を黙認し、かつての湾岸戦争時に比べ、国際的な紛争への対応も変わった。北朝鮮船が日本領海内に入った時も自衛艦出動を容認し、二〇〇一年九月一日以後の小泉内閣によるテロリズム対策法案の審議においては、対テロ特別措置法や自衛隊法改正には反対しながら、海上保安庁法改正案には賛成した（社民党はすべて反対）。

資本家団体の会合に出席し、自民党の幹部とも積極的に話し合うようになったから、自衛隊の海外派兵問題についても、

かつてとは異なる態度を示す可能性を秘めている。旧来の社会党・共産党の支持層には、日本国憲法第九条の絶対平和主義・戦争放棄擁護、日米安保条約と自衛隊に対する反対が強いだけに、党内からも指導部に反対する意見が出ている。

第二に、戦前からの日本共産党の最大の特徴であった、天皇制への態度が変わってきている。共産党が地方議会に進出して、地域社会に密着すればするほど、「草の根保守主義」やナショナリズムとの妥協を強いられる。現在でも党綱領は将来の天皇制廃止を掲げているが、一九九九年の「日の丸・君が代」を国旗・国歌にする法案の問題について、共産党は「国民的討論の下で法制化されるならば、受け入れてもいい」と表明した。これは日本共産党にとって、戦前天皇制に反対してたたかいた、多くの党員が治安維持法で弾圧されてきた伝統からいえば、奇妙な態度であった。事実、当時の野中広務官房長官は、共産党の表明を聞いて「これなら日の丸・君が代の法制化が可能だと思った」と語っている。

二〇〇一年の皇太子家の女兒誕生にあたっては、妊娠判明時に共産党市田書記局長が「喜ばしくめでたいことである」とコメントして多くの党員・支持者を驚かせた。一二月の出産時には、志位委員長が「新しい生命の誕生は等しく喜ばしい」とコメントし、国会の祝福決議にも賛成した。ここから、二〇〇三年までには開催される予定の次の党大会での党綱領改訂では、従来とは大きく異なる展望が出されることは、まちがいないだろう。

注意すべきは、階級政党から国民政党への転換が、日本共産党の場合、ナショナリズムと結びついて、日本国家や日本国民というシンボルを積極的に取り入れながら進められている点である。西欧の社会民主主義のように、労働者階級の多数を獲得してから中間層へと支持を広げていく方法とは、異なっている。

第三に、党の指導理論を、かつての「マルクス・レーニン主義」の呼称を一九七〇年代に「科学的社会主義」と改め、「プロレタリア独裁」を放棄してもなお「マルクス主義」の系譜であると名乗ってはいるが、マルクス主義理論の学習は党内で重視されず、理論と政策とのつながりも弱まってきている。

戦後の日本では、戦前侵略戦争に反対した日本共産党の道義的権威があり、その理論的支柱となった、いわゆるコミンテルン「一九三二年テーゼ」、「講座派マルクス主義」の知的影響力が、知識人・学生の中に根強かった。このマルクス主義理論への信仰が、日本共産党や社会党の支持への背景にあったのだが、そうした知的権威は高度経済成長の時代に衰退し、一九八九年東欧革命・冷戦崩壊、九一年ソ連解体で、最終的に失われた。かつて日本の大学の経済学部では、近代経済学とマルクス主義経済学の双方を学べるよう講義が準備されていたが、今ではマルクス主義を学ぶコースのほとんどが廃止された。

そこで日本共産党も、宮本顕治の時代には「スターリンは

悪かったがレーニンは正しかった」というスタンスを保っていたが、不破哲三はレーニンを公然と批判し始め、同時に黨員や知識人にマルクス主義の正統的解釈をおしつけることをやめてしまった。これは、共産党により介入・統制されてきたマルクス主義研究の世界にとつては歓迎すべきことであるが、若い時にマルクス主義を学んで社会主義や共産党を支持してきた人々にとつては、とまどいをおぼえるものであった。共産党自身が、党綱領になお残る「社会主義」や「革命」について語ることがほとんどなくなり、共産党と対立していたいわゆる「新左翼」グループも弱体化・高齢化して、日本の社会主義・共産主義思想は、崩壊寸前にあるのである。

第四に、インターネットや携帯電話の普及など、かつてイタリアのアントニオ・グラムシが、ロシア革命型「機動戦」から西欧市民社会型「陣地戦」への転換としてのべた階級闘争型政治の構造転換が、今日では「陣地戦」から「情報戦」へと新たな転換期を迎え、ポリシエヴィキの「鉄の規律」やコミンテルンの「民主集中制」で統制されてきた秘密主義的・閉鎖的な組織は、時代遅れになった。共産党や社民党も大きなホーム・ページを持っているが、インターネット上では「さざ波通信」という党内反対派の大きなホーム・ページが匿名で公然と指導部を批判している。『JCP Watch』という党内の人々が共産党について討論するホーム・ページもある。党機関紙『赤旗』を読まなくてもホーム・ページで党の動向や政策はわかるから、わざわざお金を払って購読する必要もない。

共産党指導部は、一時反対派の「さざ波通信」を批判し弾圧しようとしたが、その言論抑圧がインターネット上で話題になり、やめざるをえなかった。私自身「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」という大きな個人ホームページを持っており、『朝日新聞』紙上で「インターネットは民主集中制を超える」と述べたことがあるが、このように情報公開と知る権利が保障される「情報戦」の時代になると、共産党・前衛・赤旗・民主集中制・査問・書記局・同志といったコミンテルンの伝統に由来する名称は、秘密主義的で旧ソ連的な否定的シンボルとみなされ、再考を余儀なくされる。労働組合運動が衰退し、日本最大の労働組合である自治労（全日本自治団体労働組合）で幹部の汚職も明るみになるなかで、「労働者階級」階級闘争」といったマルクス主義用語は、社会科学の世界からも消え去ろうとしている。

第五に、日本共産党の外交政策にも変化が見られる。これまでの共産党は、アメリカ帝国主義に反対し、国際共産主義運動に依拠して国際連帯を進める、「プロレタリア国際主義」と「共産党間外交」が中心であった。ところが冷戦崩壊と共に、世界のほとんどの共産党が崩壊したため、アジアを重視して、保守勢力や外国政府にも積極的にアプローチするようになった。九〇年代半ばには、韓国や中国に機関紙特派員を置き、東南アジアの権威主義的諸国家にも不破委員長（当時）が訪問、アメリカの政治家とも積極的につきあおうとした。しかしこれも、伝統的革新層にはとまどいがある。共産党が

非合法化されているマレーシアやシンガポールににかけて、その国の政治指導者と友好的対話を持つことへの批判が、党員のなかから出ている。

第六に、国内外の市民運動やNGO・NPOとも、繋がりを持つようになってきた。平和・人権擁護や福祉の拡充を主張しながら、市民運動や社会民主主義勢力と結びつく基盤もできてきている。ただしこれが日本の政治を大きく変革する力になったり、国際的な社会主義、共産主義運動の復興に繋がることはありえないだろう。共産党の方はNGOや市民運動に近づこうとしても、かつて共産党の「引きまわし」「フлакシオン活動」を経験した市民運動の側は、共産党を信頼していない。二〇〇一年九月一日の米国同時多発テロ以降の日本では、とりわけインターネットを用いての市民やNGOの平和運動が大きく発展したが、共産党系列のいわゆる大衆団体である労働組合、日本平和委員会、日本原水協（原水爆禁止日本協議会）などは、ほとんど重要な役割を果たすことはなかった。

けつきよく共産党は、主として国会・地方議会において、今の日本で急速に進んでいる右傾化の流れに、ある程度の歯止めをかける抵抗勢力にとどまる。

第七に、組織内部で深刻なのは、平均年齢が五十歳代になる党員の高齢化と、世代交代の遅れである。民主青年同盟という共産党系の青年組織は、一九七〇年代のピーク時二〇万人からいまや二万人にも満たない勢力となった。それも共産

党員の子弟が多いといわれる。かつて党員や支持者を大量に供給した学生運動は、いまや大学ではほとんど見られず、もちろん共産党も影響力を持てなくなつた。世論調査でも、共産党への強い支持は、老人たちからのものである。

しかもこのまま方向転換すると、伝統的支持層のなかの、かつて共産主義や社会主義を夢見てきた人々の支持をも失うことになる。指導部は、現時点での政策転換を、民主主義革命から社会主義革命への「二段階革命」における「民主主義革命」の一環であると説明しているが、「社会主義革命」については、ほとんどふれなくなつた。政策転換しないと若い世代に近づくことができず、しかし実際の支持基盤は高齢化した伝統的左派であるため、イタリア共産党型の党名変更のような大きな舵取りはできずに、ジレンマのなかにある。

四 社会主義運動の展望と課題——二〇世紀日本の教訓

このように、日本共産党、社会民主党がなお政治勢力として存続しているとはいへ、日本における思想および運動としての社会主義は、二一世紀の入り口で、風前の灯である。国家ないし経済体制に転化する可能性は、全くない。

国民意識のレベルでみると、日本生産性本部の長期の世論調査で、一九七四年に「社会主義」志向が一〇%でピークに達したが、それでも「社会改良」志向五七%、「現体制」支持一七%には遠く及ばなかつた。それが「経済大国」となつ

た一九八〇年には「社会主義」四%、「社会改良」三五%、「現体制」三七%まで後退し、「ベルリンの壁」崩壊後の一九九〇年には「社会主義」一%、「社会改良」三〇%、「現体制」四二%となつて、「生活保守主義」「経済大国ナシヨナリズム」が支配的になつた。知的世界でのマルクス主義・レーニン主義の凋落、とりわけ若い世代での「社会主義・共産主義はなれ」とあいまつて、将来にわたつて「社会主義」が国民に受け容される可能性は、ほとんどないように見える。

一九八九年以降、旧ソ連の公文書館から日本社会主義の歴史についての秘密文書が現れて、日本共産党が「誇り」にしてきた戦前・戦後の党史についても、新しい事実が次々に発掘され、学問研究の対象となつてきた。たとえば私自身がモスクワで発見したのだが、これまで存在が知られていなかった一九二二年九月日本共産党創設時の綱領がみつかり、創立時の党（第一次共産党）は、荒畑寒村・堺利彦・山川均らの指導する、むしろ戦後の日本社会党につながる流れであつたことが判明した。一九二七年にコミンテルンから「二七年テーゼ」を与えられるまでは、「天皇制」を問題にしていなかったこともわかつた。かつて片山潜・野坂参三・山本懸蔵が加わつてつくられたとされてきた「三三年テーゼ」作成に、日本人共産主義者はほとんど関与しなかつたこと、一九三〇年代後半の「スターリン粛清」の時期に当時ソ連にいた約八〇人の日本人が「スパイ」の汚名で逮捕され銃殺・強制収容所送りとなり、無傷で生き残つたのは戦後日本共産党の「顔」

となつた野坂参三のみであつたこと、その野坂が生き残つた理由は、「同志」であつた山本懸蔵を批判・告発して自己保身をはかつたためであつたこと、等々が明るみに出て、日本共産党自身も、百歳を越えて「名譽議長」をつとめた野坂参三を除名せざるをえなかつた。戦前・戦後の党資金の出所や、宮本顕治が一九三三年に関わつた「スパイ査問致死事件」についても新たな史資料が出てきて、二〇〇二年夏の党創立八十周年を前に、党史の再検討を迫られている。フランスで「共産主義黒書」が大きな話題になつたように、ソ連・東欧の「現存した社会主義」の歴史に加えて、日本共産党の八十年の歴史も、日本の社会主義運動にとつては二〇世紀の負の遺産となりつつある。^{*15}

イタリア共産党の場合は、こうしたコミンテルンの過去を清算して、左翼民主党Ⅱ社会民主主義に変身し、フランス共産党も「自己批判」して、過去に党から追放・除名された人々を「名譽回復」し、復帰をよびかけることまで行つた。しかし日本共産党はなお、そこまでコミンテルンの過去から脱皮することができず、党機関誌「前衛」の名前を変えることをいつたん発表しながら、適当な代替案がなくて、なおそのままで存続している状態である。このような方向では、遅かれ早かれ日本の「社会主義」はいっそう衰退し、すでにゲットー化している現状から、脱する展望はない。

唯一の可能性は、冒頭にのべたフランス革命期までさかのぼつて、広義の社会主義思想を、日本に再生させることであ

る。しかしその場合は、「平等主義」だけではなく、「自由・友愛」も「人権・市民社会・民主主義・女性解放」をも包み込んで、現存資本主義社会へのさまざまな批判思想・運動を、自由に発展させる必要がある。マルクスの一九世紀資本主義批判は参照されるにしても、「階級闘争」一元論や「労働者階級の前衛党」といった思考が、日本で生き残る可能性はほとんどない。むしろ、アメリカ資本主義中心のグローバリゼーションが進行するもつとで、戦後日本でかろうじて培われてきた平和主義と民主主義、市民運動・女性運動やNGO・NPOにより形成されてきた自由で民主的な新しい国際連帯こそ、かつて「社会主義」とよばれた日本の批判思想が受け継ぎうる、二〇世紀の遺産となるだろう。

この場合、理論的には、マルクス主義と関わる、二つの原理的問題がある。^{*16}

その第一は、生産手段の所有関係で規定される「階級」という社会的存在形態が、人間の「自由・平等・友愛」の実現のために、どのような意味を持つつかという点である。第二は、社会主義は、人間が自然を改造しての生産力の無限の発展を前提にできるか、またすべきであるか、という問題である。

一九世紀の社会主義は「自由・平等・友愛」を求めて出発しながら、資本主義のもとでは生産力が十全に発展できないので社会主義にするという理論構成に向かい、二〇世紀には資本主義との体制間成長競争に入ったのだが、この百年の飛躍的な生産力発展と、その地球環境・生態系破壊、核兵器か

ら遺伝子操作までの経験を踏まえると、無限の生産力発展のための社会主義という構想は、二一世紀の人類にとっては、少なくともも発達した資本主義の世界では、魅力のないものになるだろう。

もちろん実際の生産力発展の基礎には資本主義があり、マルクス『資本論』は、その蓄積メカニズムを原理的に洞察した「古典」である。しかしその資本主義も、二〇世紀に大きく変貌した。この問題を考えるためには、二〇世紀が人類史上未曾有の物質的生産力拡大の時代であり、地球環境・生態系破壊の時代であり、ホブズボーム流に言えば「極端の時代」であったことを、想起すべきである。¹⁷それは、マルクスを含む一九世紀社会主義者の想像を絶するものであった。市場と国家の関係も、資本主義の発展そのものによって、相互依存的なものになった。社会主義者の構想した市場経済の国家的規制・計画化は、ケインズ主義の時代に資本主義そのものにもビルトインされて、労働者の貧困や失業の問題も、社会保障や福祉国家によって補われるようになった。

むしろ問題は地球大に広がって、「顔の見える資本家」から株式会社、所有と経営の分離、法人資本主義へと脱人格化した資本が、国境を超えて世界市場を支配する多国籍企業となり、国家間・国民社会間の格差を大きく拡大した。レーニン『帝国主義論』は、かつて「独占資本主義」のもとの「労働者階級の買収＝労働貴族」を説明し、帝国主義世界戦争の不可避を説いたが、今日の世界経済の生産統合は、むしろカ

ウツキーの「超帝国主義」に近い。その南北格差は、「民族自決権」による旧植民地の国家的独立では「国民経済の自立」を許さないほどに深化し、深刻化している。一九九七年のアジア金融危機は、そのことを如実に示した。アメリカ中心のグローバリゼーションである。

いわば、二〇世紀資本主義主導の国家と経済の相互浸透と、国民国家単位での地球的領土分割の完了が、ソ連型の「現存した社会主義」の国有化・計画経済構想を、後発発展途上国の「開発独裁」の一類型と再把握させ、その生産力的パフォーマンスの貧しさゆえに、「社会主義」そのものを、魅力のないものとした。「後発工業化」「開発独裁」の原型とみなしても、日本型高度成長や東アジア工業化モデルという、別のかたちがありえたことになる。「資本主義のもとでの社会主義革命から共産主義へ」の唯物史観の想定が、「社会主義による近代化を経て資本主義へ」のモデルに変換されると、発達した資本主義国での「社会主義」は、いよいよ魅力のないものとなる。

国民経済内部に立ち入っても、「現存した社会主義」の国有化や中央指令型計画経済は、直接生産者に「労働の喜び」をもたらすものではなく、むしろ労働者階級の利益を潜称し「代行」した党ノローメンクラトゥーラ層の、非効率で無責任な経済運営を横行させた。情報独占と政治的民主主義の欠如のもとでは、生産指標の改竄やサボタージュが労働者の無言の抵抗であった。逆に高度経済成長を達成した日本では、環

破壊や労働災害も極端で、「過労死」とよばれる働き過ぎの突然死さえ経験して、「ゆとり」や「アメニティ」が切実に求められるようになった。^{*18}

しかし、一九世紀社会主義にまで遡ってみると、そこには、産業化・工業生産力発展そのものに疑問を持ち、職人的小生産社会・農耕共同体に「自由・平等・友愛」の原型をみる思想も含まれていた。エンゲルスにより「ユートピア社会主義」とされた流れがそうである。マルクスの「協同社会 Association」概念が注目されているのも、「資本主義の生産力と生産関係の矛盾」社会主義による生産力解放」よりも、「労働の疎外克服」や「人間主義」自然主義」に社会主義の原像を見いだそうという、原点への回帰である。無論そこには、二〇世紀科学技術・生産力発展のもたらした環境・生態系破壊、生命・人間性破壊への危機意識が投影されている。いわば、二〇世紀型生産力発展へのブレーキ、人間的歯止めとして、社会主義思想を再興しようという志向である。

この点では、社会主義を、むしろ科学技術と生産力を人間的に制御する思想として矯正することが必要だろう。その関連で、「労働を通じての解放 (Arbeit Macht Frei)」というナチスの強制収容所にかかっていた思想を、再吟味する必要がある。労働者が生産過程における直接生産者であり生産力の本来の担い手だから人類解放の主体たりうる、機械制大工業のもとで潜在的には全面的に発達した個人になり経済も政治も制御できるようになるといった観念を、二〇世紀資

本主義の現実的展開に照らして、考え直す必要がある。

私自身は「脱労働の社会主義」と言っているが、古代ギリシャのポリス市民まで遡らずとも、近代社会の歴史的展開に即してみても、「労働時間を通じての解放」よりも「自由時間を通じての解放」が、「労働による解放」ではなく「労働からの解放」という視点が、必要だと思われる。ハンナ・アレントやユルゲン・ハーバーマスは、それを労働 *work* と仕事 *work* と活動 *action* の区別と連関、道具的・技術的コミュニケーションから批判的・理性的コミュニケーションによる公共圏構築へとという論理で説いてきたが、社会主義思想の出发点における平等主義的で共同的・友愛的なオリエンテーション^{*19}を考えれば、こうした大胆な発想の転換が必要と思われる。

ただしこの面でも、「現存した社会主義」は、反面教師である。自由と民主主義はもとより、環境保護や人間性尊重ではミゼラブルであった。メドヴェージェフ教授が先駆的に分析し、ソルジェニツインらが告発してきたように、一九三〇年代後半のソ連の大粛清期には、全労働力の一割近くが強制収容所の奴隷労働に従事していたから、一方でノーメンクラトゥーラ特権層の跋扈する経済的不平等社会でもあったばかりでなく、西欧の歴史学という「奴隷包摂社会」でもあった。強制収容所の奴隷労働力は、白海運河建設やシベリア開発に動員されて、ソ連型計画経済にビルトインされていた。

そして、そもそも「世界ブルジョアジー対世界プロレタリ

「アート」というコミンテルンの階級闘争図式は、宗教や民族や階級内の社会層（階層）を、生産手段の所有・非所有に還元してすべてを階級関係に従属させることで、現実の二〇世紀の歴史の展開には、無力だった。ましてや、女性の解放を階級闘争に従属させてきた点で、政治的に誤っていた。今日では、国家主義の延長上で地球のプロレタリア独裁・集権的計画経済を夢見るよりも、ローカルなコミュニティで Association を構想し、そのネットワーク型共生のなかで多国籍企業や国家への抵抗を考える方が、はるかに社会主義的である。いいかえれば、政治的民主主義と市場経済を前提とした、「国家中心主義」に対する「社会中心主義」ないし「市民社会主義」としての社会主義である。

「現存した社会主義」の歴史的教訓の一つは、思想の自由・文化的多元主義が、社会主義にとって不可欠なことであつた。それは、社会主義の定義そのものにも適用されねばならない。「何が社会主義であるか」をも、後世の歴史の審判に委ねる、思想的寛容が必要である。

その意味で、日本の社会主義はいつたん自然死し、新たな名前で再生することが、課題となっている。中国の皆さんとの日中戦争の「自己批判」をふまえた連帯は、その不可欠の条件のひとつなのである。

*1 社会主義 Socialism の語は、イギリスでは一八二七年に

ロバート・オーウェン派の機関紙に初めて現れ、フランスでは一八三三年にピエール・ルーが「個人主義」との対比でサン・シモン派の思想をさして用いたといわれる（加藤哲郎「二〇世紀を超えて——再審される社会主義」花伝社、東京、日本語、九ページ以下）。Wolfgang Schieder, Sozialismus, in, Geschichtliche Grundbegriffe, Stuttgart. Hans Pelger, Was verstehen Marx/Engels und einige ihrer Zeitgenossen bis 1848 unter "wissenschaftlichen Sozialismus", "wissenschaftlichen Kommunismus" und "revolutionärer Wissenschaft"? in, Wissenschaftlicher Sozialismus und Arbeiterbewegung, Trier 1980.

*2 重田澄男「資本主義の発見」御茶の水書房、一九八三年、【資本主義とはなにか】青木書店、一九九八年、【資本主義を見つけたのは誰か】桜井書店、二〇〇二年。重田の研究によると、マルクス【資本論】全三巻では、【資本家的生産】が一三二回、「資本家的生産様式」は二〇一回と頻出するが、「社会」の形容詞としての kapitalistische は一二回で、bürgerliche の一六回より少なく、「資本主義 Kapitalismus」は第二巻で一度だけ、概念規定なしに現れるだけだという。

*3 以上については、加藤哲郎「社会主義と組織原理」窓社、一九八九年、同「東欧革命と社会主義」花伝社、一九九〇年（韓国語版 Hanulrang Press, 1990）、同「社会主義の危機と民主主義の再生」教育史料出版会、一九九〇

年、同「コミンテルンの世界像」青木書店、一九九一年、同「ソ連崩壊と社会主義」花伝社、一九九二年、加藤他「社会主義像の展相」世界書院、一九九三年、加藤他「ローザ・ルクセンブルクと現代世界」社会評論社、一九九四年、加藤他「グラムシは世界でどう読まれているか」社会評論社、二〇〇〇年、和田春樹・小森田秋夫・近藤邦康編「社会主義——それぞれの苦悩と模索」日本評論社、一九九二年、社会主義理論学会編「二〇世紀社会主義の意味を問う」御茶の水書房、一九九八年、塩川伸明「現存した社会主義」勁草書房、一九九九年、および前掲「二〇世紀を超えて」参照。

* 4 Zbigniew Brzezinski, *The Grand Failure: The Birth and Death of Communism in the 20th Century*, Scribners, New York 1989.

* 5 日本のインターネット・ホームページ宮地健一「共産党問題・社会主義問題を考える」<http://www2s.biglobe.ne.jp/~mike/kenichi.htm> は、冷戦崩壊後の共産主義運動を「ヨーロッパでの終焉とアジアでの生き残り」と総括して、以下のように分析している。

第一に、ソ連型社会主義であったソ連、モンゴル、ポーランド、東ドイツ、ハンガリー、チェコスロヴァキア、ルーマニア、ブルガリア、アルバニアの九か国の共産党は、すべて崩壊した。旧共産党系政党は残っているが、ロシア以外では社会民主主義的政党に変化している。独自の社会主義をめざした旧ユーゴスラビア共産主義者同

盟も解散した。

第二に、発達した資本主義国では、一時「ユーロコミニズム」といわれたイギリス共産党が一九九二年に解散、一部はデモクラティック・レフトを結成し、別の一部は労働党に参加してそのブレインとなった。オランダ、ベルギーの共産党も解散した。スウェーデン、フィンランドの共産党は、ソ連・東欧共産党の失敗は共産主義運動自体の失敗であるとして、非共産主義左翼に転換した。アイルランド共産党は分裂し、国会議席はゼロになった。「ユーロコミニズム」の中心であったイタリア共産党は、すでに一九七六年の党大会で「プロレタリア独裁」の用語を放棄、八九年には「民主集中制」を放棄し「分派禁止」規定を削除、九一年第二〇回党大会で左翼民主党に転換し、九六年総選挙で「オリーブの木」とよばれる中道左派連合政権に入った。少数派は共産主義再建党を結成したが、左翼民主党二・一%、共産主義再建党八・六%の得票率であった。

同じく「ユーロコミニズム」の一翼であったスペイン共産党は、一九八三年に親ソ派、カリリョ派、ユーロコミニズムを党内民主主義の徹底化にまで深化させることを主張する新世代派に三分裂したが、その後の再建活動の中で八九年に選挙ブロックとしての統一左翼を結成、九一年に「民主集中制」を放棄した。統一左翼は、八九年総選挙で九・一%、九三年総選挙では九・六%、九六年総選挙で二一議席を得たが、二〇〇〇年総選挙で

大敗、八議席に後退した。

かつて「モスクワの長女」とよばれたフランス共産党は、一九七六年第二二回党大会で「プロレタリア独裁」を放棄、八五年第二五回党大会頃から党外マスコシでの批判的意見発表も規制されなくなった。九四年第二八回党大会で賛成一五三〇、反対五二、棄権四四人の圧倒的多数で「民主集中制」を放棄した。九六年第二九回党大会で、「リニタシオン（変化）」を提唱し党改革をはかった。しかしフランスでは「共産主義黒書」も刊行されており (Stephane Courtois et al., *Le livre noir du communisme: crimes, terreurs, repression*, Robert Laffont, Paris 1997)。第二次大戦直後に四〇万部であった機関紙「ユマニテ」は、一九六〇—八〇年に一五万部、九七年六万部、二〇〇一年四万五千部に減少した。なお党名は残されているが、二〇〇〇年第三〇回党大会への党員の意見表明は三万人以上上った。

なお「民主集中制」を維持しているのはポルトガル共産党で、一九九一年総選挙で八・八%を得票したが、十数年で半減、議席も前回選挙からほぼ半減した。ヨーロッパ共産党のなかでもっとも早く「プロレタリア独裁」を放棄、九二年第一四回党大会では、八九年の党大会より数万人減って党員一六万人であった。ソ連崩壊を「世界の労働者と人民の巨大な損失」として、マルクス・レーニン主義を堅持している。

そして、アジアにのみ、中国共産党のみならず、ベト

ナム共産党、朝鮮労働党、インド共産党、日本共産党などが有力な政治勢力としてなお生き残っている。

- * 6 以上については「Tetsuro KATO, Japanese Perceptions of the 1989 Eastern European Revolution, in, Ian Neary ed., *War, Revolution and Japan, Japan Library, Sandgate 1993.* Tetsuro KATO, *From a Class Party to a National Party: Japanese Communist Party survives through the worldwide decline of communist parties*, AMPO, Vol.29, No.2, March 2000

* 7 加藤前掲「二〇世紀を超えて」参照。

* 8 「日本共産党ホームページ」<http://www.jcp.or.jp/>

* 9 「やむ波通信」<http://www.jinkclub.or.jp/sazan-tu/top.html>

* 10 「JCP Watch —— 日本共産党を考えよ」<http://jcpw.site.ne.jp/>

* 11 「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」<http://www.ff.jifu.or.jp/~katoe/Home.html>

* 12 加藤哲郎「民主集中制からの脱皮を」『朝日新聞』一九九七年九月六日、同「日中両共産党首脳会談について」『朝日新聞』一九九八年七月二二日。

* 13 加藤哲郎「ネットワーク時代に真のデモクラシーは完成するのか?」『データパル 2002』小学館、二〇〇二年、参照。

* 14 日本生産性本部「働くこと意識」各年調査での「日本社会は資本主義社会といわれていますが、あなたはどういう体制を望みますか」への回答。同一設問で筆者の

実施した学生政治意識調査でも、ほぼ同じ回答分布になる。加藤哲郎『現代日本のリズムとストレス』花伝社、一九九六年、参照。

* 15 小林峻一・加藤昭「闇の男——野坂参三の百年」文藝春秋社、一九九三年、不破哲三「日本共産党への干渉と内通の記録」上下、新日本出版社、一九九三年、加藤哲郎「モスクワで齟齬された日本人」青木書店、一九九四年、同「国民国家のエルゴロジ」平凡社、一九九四年、社会運動資料センター「野坂参三と伊藤律」五月書房、一九九四年、加藤他「人間 国崎定綱」勁草書房、一九九五年、加藤哲郎「一九二二年九月の日本共産党綱領（上・下）」（法政大学「大原社会問題研究所雑誌」一九九八年一月・一九九九年一月）、同「第一次共産党のモスクワ報告書（上・下）」（「大原社会問題研究所雑誌」一九九九年八月・十一月）、同「『非常時共産党』の真実——一九三一年のロシントレルン宛報告書」（大原社会問題研究所雑誌）二〇〇〇年五月）、Tetsuro KATO, Biographische Anmerkungen zu den japanischen Opfern des stalinistischen Terrors in der UdSSR, in, Hermann Weber hrsg. Jahrbuch für Historische Kommunismusforschung 1998, Akademie Verlag, 1998 Berlin. Tetsuro KATO, The Japanese Victims of Stalinist Terror in the USSR, Hitotsubashi Journal of Social Studies, No.32, No.1, July 2000. 和田春徳「歴史よこしの野坂参三」平凡社、一九九六年、和田春徳・マジンクロン編「連共産党」ロシントレルン、日本資料集一九

一七一四一」ロシア語版「モスクワ」二〇〇一年、Sandra Wilson, The Comintern and the Japanese Communist Party, in, T.Rees and A.Thorpe eds, International Communism and the Communist International 1919-43, Manchester University Press, 1998. フランソワの前掲「共産主義黒書」は、英語版・ドイツ語版のほか、二〇〇一年には日本語版も刊行された。

* 16 以下は、加藤哲郎「二〇世紀を超えて」の主張の要約である。

* 17 Eric Hobsbawm, The Age of Extremes: The Short Twentieth Century 1914-1991, Michael Joseph, London 1994.

* 18 Tetsuro KATO, The Political Economy of Japanese KAROSHI (Death from Overwork), Hitotsubashi Journal of Social Studies, Vol.26, No.2, December 1994. Tetsuro KATO, Workaholicism — It's not in the Blood, Look Japan, February 1995. Tetsuro KATO and Rob Steven, Is Japanese Capitalism Post-Fordist?, in, J.P.Arnason and Yoshio Sugimoto eds, Japanese Encounters With Postmodernity, Kegan Paul International, London/New York 1995. Tetsuro KATO, Japanese Regulation and Governance in Restructuring: Ten Years after the 'Post-fordist Japan' Debate, Paper presented to the International Conference "East Asian Modes of Development and Their Crises: Regulationist Approaches" (Tunghai University, Taichung,

Taiwan, April 19-20, 2001). 加藤哲郎「現代日本の労働時間与政府的作用——過労死与義務加班的政治経済学」
「日本政府在経済現代化道程中作用 復旦大学日本研究中心第三屆國際研討会」復旦大学出版社 中文、上海、一九九五年。

* 19 Hannah Arendt, *The Human Condition*, University of Chicago Press, Chicago 1958.

Jürgen Habermas, *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*, The MIT Press, Cambridge, 1989.

* 20 Roy A. Medvedev, *Let History Judge: The Origins and Consequences of Stalinism*, Alfred A Knopf, 1972. Aleksandr Isaevich Solzhenitsyn, *The Gulag Archipelago*.

Il prigioniero Vita di Antonio Gramsci

囚われ人 アントニオ・グラムシ

アウレリオ・レプレ 著
小原耕一＋森川辰文 訳

—— 解明された革命家の素顔 ——

政治哲学から国家論・文化論そして組織論まで、透徹した眼差しのマルクス読解によって、現代思想の問題群を先取りした革命家グラムシ。
謎多き獄中の思索や苦闘など、豊富な新資料の開示から浮上する人間グラムシの真実。

青土社刊 ●四六判上製 ●定価：本体2600円＋税

石堂清倫さんに一九四〇年代前後を聞く

聞き手 横手 一彦

日本評論社の編集者

横手 石堂さんは、戦前の日本評論社の仕事など貴重な体験を本に書かれています。その体験から広がって、戦前期の表現の自由に対する考え方をお聞きしたいのです。

石堂 私に勤めた日本評論社は、どちらかというところ右翼的な出版社です（一九三三年十一月十五日懲役二年執行猶予五年の判決で転向出獄——カッコ内は聞き手による後日の補記）。東大経済学部教授の土方成美と河合栄治郎は性格が違うのですが、反マルクス派という点で結合して、大内兵衛たちのマルクス経済学派に対抗する。土方や河合の言動が全体の経営方針を左右するような、その影響が強い出版社でした。

その出版社が私を採用したのは、多分、土方派の若い研究者で私の高等学校の先輩（土方の弟子で日滿財政経済研究会の長守善）がおり、土方を動かす推薦する形で私は社長に面接した。日本評論社は最初、必ずしも私を採用するつもりはなく、土方に対する義理上、一応面接し断るつもりでした。それは昭和九年の一月早々で、社長の机の上に官報があり、この官報に広田外務大臣の施政方針演説が載っていて、それを社長が四五分で四〇〇字詰め一五枚にまとめてみると言ったのです。別に、困難なことではありません。ところが今度、それを持って外務大臣のサインをもらって来いと言うのです。さあ困りました。失業中で名刺一つない人間です。社長の腹では、それを口実に採用を婉曲に断るつもりだったと思います。

外務省へ行ったのですが、もちろん会わせてはくれませんが、受け付けてもくれません。記者クラブがあり、朝日や毎日の記者になんとか大臣に会う方法を聞き出そうとしたのですが、ダメだダメだと相手にしてくれませんか。私が午前の十時くらいに行っただけです。ちょうど土曜日で、お昼になると半ドンで職員も帰るし、記者クラブもみんな帰る。そうするとストープも消えるし、寒くはなるは、途方にくれました。このまま引き下がるのも残念で仕様がなかったので、大臣をつかまえるチャンスがあるかもしれないと待ちました。段々腹がへり、電気がつく夕刻になりました。仕方がないまま高等官用の便所で用をたしていたら、隣りに広田大臣がやって来て、二人並んでおしっこをした。大臣が、「お見かけしないお顔だが、どなたですか？」と聞く。私は実は「こうこう」と言う、「それはお気の毒をしました」と言って、大臣の案内で大臣室に案内され、秘書官は、こういう人がいるなら取り次がないと駄目だ、と叱られていました。それでは、拝見しましょうというのです。そして、「これは非常によくできています。自分の演説よりよっぽどよくできているから、このまま雑誌にお出しになってかまいませんよ」と言って、毛筆で「広田弘毅」と署名し判子を押ししてくれたのです。それをもらったのがもう夜（七時半）で、雑誌の締切日であり編集部全員が、共同印刷へ行っていると思ったのです。私は学生時代、ストライキに参加したことがあるので共同印刷の場所はよく知っていました（一九二六年一月十九日印刷職工二三〇〇人罷業し

六〇日の大争議・東京印刷労働者の書記は元新人会員の大島英夫で争議団本部でその指示に従う。共同印刷へ駆けつけたら、社長（鈴木利貞）がまだいて、大臣がサインした原稿を渡したのです。追っ払う種にしようと思っただけに、ちゃんと直筆のものを持って来たので、仕方なしに採用となりました（『経済往来』第九巻四号「帝国外交の基調」）。大臣と並んで用を足すことがなかったら、そうはならなかったでしょう。そういう調子で仕事を始めた（同期学友の待遇の三分の一相当の月給五〇円——後に七〇円）。おそらく社長は、内務省警保局へ行っただけで、こういう人間を余儀なく採用したけれども、どうせ本人は続かないだろうから採用を認めてくれと頼んだと思います。社長は、私の言動をいちいち当局に報告していたらしいのです。前歴を承知の上で、当局にいろいろ聞いてもいるのです（一九二八年三月三十日檢挙・この時両親の喉仏と全財産五銭が入った蝦蟇口と母が愛用した遺品ショールを失う・拷問）。

その頃日本評論社は、経営難で殆ど破産状態だったのです（改造社との円本経済学全集販売競争）。著者の印税も滞り、雑誌の原稿料も遅れ遅れになっている。どこへ行っても不払いの文句ばかり言われ、新しい原稿を依頼するどころではなかった（保守派の雑誌『経済往来』・リベラル派は『中央公論』や『改造』に寄稿）。それでも辛抱しているうちに、社は信用しないがこの男に免じて書いてやろうという人が少しずつ増えてきます。半年ぐらいの後に、印税や原稿料の不払いを

口実に玄關払いをされることなく、行けば会ってくれるようになりました。

編集会議の内容が全部当局にわかるのですから大変やりにくいのですが、企画を立て活動を始めた。あの頃は若く気力もありましたから、人ができない企画ができたと思うのです。例えば『経済往来』が米の特集号をする時に、柳田國男さんの原稿をもらって来いと言われました。成城学園の柳田さんのお宅へ行ってお話ししたところ、「自分は非常に忙しくて執筆している時間はない。ここで口述するから筆記していきなさい」と言う。しかし私は、それを筆記しなかった。ただ田植え歌のような古い民謡は先生の言うとおりに書きました。

記憶をたよりに原稿を起こし、「これでいいでしょうか」と柳田さんの家へ持っていった。柳田さんは、私を知っていたと思うのです。彼の弟子に大間知篤三という級友がいて（一九二五年夏中野重治は大間知と林房雄を通じ新入会に入会）、私がどんな男か聞いていたのでしようね。私の顔を見て「原稿を見ないよ」と言うのです。書く時間がないと言っていたとおりに、原稿を見れば直す時間がない。見なくてこのまま使っている、と言うのです。それで、使いました（「田植の話」第九巻六号『経済往来』——『定本柳田國男全集』第三一巻）。それが、新聞の文化批評の欄で非常に評判がよかった。文体が非常に素晴らしいと褒める（杉山平助評）。ところが、柳田さんの文体と私の文体と全く違う。それで、柳田さんも褒められて迷惑だったと思うのですが、そういうこともあり

ました。

あの頃近衛内閣に期待する声が強く、近衛さんが親善特使として対米交渉のためアメリカに行つて、ルーズベルト大統領とハル國務長官に会つて来た帰朝報告会が霞山会館でありました（会談は一九三四年六月八日）。社長が近衛さんの話をチェックして来い、というのです。日本評論社よりも一段格上の中央公論や文藝春秋は、新聞社の政治部長などと連絡をとつて、ちゃんと各社専門の速記者を入れていた。素人の私が、専門の速記者に対抗し原稿を書いても勝負にならない。これを全然筆記せず、近衛さんの顔を見ながらアメリカに行つた近衛さんの腹のなかを想像し原稿を作つたのです。それを永田町の近衛さんの屋敷に持つて行くと、家扶というか三太夫というか、その役回りの人が会わせてくれない。どうしようかと思つて夕刊を見たら、近衛貴族院議長は軽井沢の別荘へ静養のために行くところ。社長に話して軽井沢までの往復の汽車賃をもらい（五円）、誰もいない軽井沢で直談判しようと考えたのです。

上野駅は、次の首相だというので、ちゃんとした羽織袴とかコートを着た何百人かが天皇を見送るように肅然とつて来る。近衛内閣に対する期待が強いのだとわかりました。信越線は機関車のすぐ後ろと最後尾に二等車がついていた。私は、最後尾の車に乗りました。退屈と思つて夕刊を五、六紙買い、駅売りのお湯を二つばかり買っておきました。私の乗っている二等車はがらんどうでした。近衛夫妻とお嬢さんが

私のすぐ近くに座ったのです。上野を発ち近衛さんが夕刊を買っておくのを忘れた、と奥さんに話していた。私は、「立ち聞きしていたようで悪いけれども、夕刊をご覧になるのでしたらこれをご覧下さい」と揃えて差し上げた。鷹場のもので、「どうもありがとう」と受け取りました。急行ですから、どの駅にも止まらない。売店もないし、車内販売もない時代です。大宮を過ぎ、「お茶を買うのを忘れていた」と言うのです。「手をつけていないので、よろしければ」と言ったらこれまた喜んで、「ここに来て一緒に座りなさい」と言うのです。そして近衛夫妻が並んで座っていて、空いていたお嬢さんの隣に座りました。それで「どちらへおいでですか」と言うから、「軽井沢まで行くのだ」と言いました。奥さんが新聞やお茶などで多少親近感を持ったのでしょうか。「軽井沢で何をなさいますか」と聞くから、「大変ぶしつけない話だけれども、近衛さんにお会いして、霞山会館のお話を自分なりに書き留めたから、それをご覧いただけないかお願いします」と言いました。奥さんが「あなた読んであげなさいよ」と言っていて、読んでくれたのです。それで「非常によくできているから訂正しないで、このまま自分の名前で出してよろしい」と言うのです。「それでは、軽井沢に着いたその足ですぐ東京へ帰ります」と言いましたら、「泊まっていきなさい」と言う。奥さんが「今日、いろいろお世話になったから」とご馳走してくれました。その時初めてジンギスカン鍋を食べ一晩泊まりました。翌日、近衛さんに認めてい

ただいた上にお願ひするのは厚かましいけれども、最初の一枚と最後の一枚をあなたの直筆で書いていただけませんか。それは何でもないと行って、二〇枚ばかりの原稿の第一枚を近衛さん自筆で書きました。最後の一枚は二、三行でした。非常に気に入ってもらい、もし自分に用がある時には、これからは来客があるうと、医者が来て診療中であるうと必ず会ってあげるから、家令には話しておくから、ちよいちよい遊びに来いと言うのです。それで喜び勇んで帰ったわけです。

校正刷りができる間（「米国より帰って」第九卷九号「経済往来」）、ライバルの中央公論や文春の校正を見たなら、速記原稿だから内容が一字一句違わない。それに対してがらりと変わった調子で、近衛さんが直筆で書いている。それで、文春はさすがにジャーナリストだ。競争にならないと掲載をやめてしまった。『中央公論』と『改造』は同じ内容の平凡な講演速記を出した。そんなことがあって、治安維持法違反の歴史というハンディキャップはあったけれども、多少いろいろな人に認められ、割合にやりよかった。本職の出版企画も立て、だいたいうまくわたってこれた（出版部員一人）。二年目くらいになりますと、私の出す出版物がだいたい黒字のものが多くなって、殆どの負債を償却するくらい業績が良くなった。ジャーナリズムは不思議なもので、昇り坂になると何でもないものまで売れる。満州事変の後ですが、稲葉岩吉増訂『満州発達史』という古くさいちっとも面白くない本があります。売れないと思つて高い値段をつけて出したら、馬鹿

に売れる（五〇〇部）。おかしいものですね。三円五〇銭の定価をつけたので一冊売れば、一円儲かる。そんな偶然もあつたりして、なんとかできると思つてやつていたのです。

私は、出版物では岩波書店に対抗することを目標に考えました。岩波は哲学、文学関係で有名だから、それで競争すれば五年や六年では追いつけない。岩波で一番手薄なのは経済学で、その関係で岩波を抜いてやろうと。これは三年目位で抜くことができた。どこの社でもプロフェッサー級の人はすでに関係がある。私は、各大学の助教授や助手あたりと親しくし、彼らの研究計画を企画に取り入れた。京都大学の青山秀夫（「独占の経済理論」）などが助手で、一桶の若手を含めそれがうまくあつた。次第に経済学の分野では、どこと競争しても恥ずかしくない実績ができた。マルクス経済学に対する弾圧が激しいので、一種の空白地帯ができていた時に、近代経済学の進歩的な研究力旺盛な有為の助手、助教授クラスを発掘するという考え方がよかつた。彼らの関心は、マルクス主義の影響を切り抜けながら、どう独自の理論を形成するかにある。

出版物検閲は、内務省図書課でやるのです。図書課には専門の検閲員が七、八人いたと思います。その中に顔を知った人がいて、この連中と親しくした方がいいと思ひ、彼らがどういうことを嫌っているのかいろいろ聞いた。そのへんを検閲の新聞本文みたいなもの（府県長官宛にその都度局長名で出された内務省警保局通達、あるいは部外秘扱いで月毎に刊行

された出版警察報）を見て確認した。私は、割合発売禁止、削除命令など受けなかつたようです。当局の取り締まり方針の盲点を考え、そこを把握すればかなり変わった企画も出来ると、執筆者の人と相談しました。厳重な取り締まりには、かならず間の抜けた盲点があるものです。軍部ほど専制的なところはなないけれど、その専制性の内部にはどこにもないペラリズムがある。これは非常に不思議なことです。陸軍省（経理局の森武夫（当時大佐）は、軍事経済の研究者ですが陸軍省部内では合理的な人でした。そこへ行つてみると、私等がびっくりするようなソ連の軍事経済の研究書がある。そういうところを見ると、陸軍省の主幹部たちはかなり自由なことが言える。

隙間隙間を考え、検閲の空白地帯を逆手に利用して、反動攻勢がやたら強くても何かしら意味のある仕事ができそうでした。私は、前司法大臣小山松吉を知り、彼は幸徳秋水事件担当の一番若手の検事でした。その人に、「日本精神読本」を書いてもらいました。この人は、赤旗事件と幸徳事件の調書を本のなかに入れた。それで「大丈夫ですか？」と聞くと、「大丈夫だ、公判というのは国民に公開するのだから、しかも何十年前の裁判でかまわない」と。しかし、図書課は前司法大臣であろうとも発売禁止するという。私はおもしろいと思つて、各新聞社の文化部記者などに話した。みんな面白がつてやれやれ、と言う。内務省が前司法大臣の本を発売禁止にしたら、大問題になりそれだけで売れるよというわけ。

その時は結局、内務省が私ではダメだと思つて、社長を脅したりすかしたりして、社長の方が自発的に撤回しました(社長独断の削除本製作)。また読本シリーズは、民法読本とか国民経済読本とか続いた。私はジャンルを抜け、「榮養読本」を作つた。鈴木梅太郎さんというビタミンの大家がいて、鈴木さんの門下生が皆成功しているのに、一人だけ日の当たらない男がいる。酒ばかり飲んで、女遊びする人物で、その人を執筆者にしてビタミン剤の研究を中心にした本を作ろうと考えました。アメリカでビタミンに関する本が売れるきつかけを調べてみました。案外、アメリカではビタミン剤の通俗本は売れない。専門研究書を装つて、内容が通俗的なものがアメリカで馬鹿に売れていることがわかつた。鈴木さんのところでその話をしたら、「それは面白い考えだ、君ならどうするか」と言うので、内容は高等女学校の生徒が読んでもわかる程度にし、欄外にいちいち構造式を入れたいと答えた。それは、良い考えだという。そうしたら、恐ろしく売れる。

二、三〇万売れたのではないでしょうか。
次第に政治情勢が変わつて、今度はリベラリズムが邪魔になつてきた。そのため河合が、軍部に対する批判を始めた。すると軍部をバックにしていた土方と仲が悪くなつて、河合の本が発売禁止になる(一九三四年十二月「日本ファシズム批判」——内務省図書課に内々自発的絶版を求められたが著者及び編集者は拒否し公的手続きで発禁本となる)。今でも日本評論社の仕事で一番よかつたと思うのは、河合の監修「学生

叢書」(一九三六年十二月〜四一年十月全一二冊)です。これは学生に対するリベラリズム的な世界観を、「学生と教養」、「学生と人生」、「学生と芸術」など表題毎にリベラルな人に執筆を願つた本です。マルクスの傾向が後退した時に、リベラリズムの最前線の人たちを網羅したこの啓蒙書が、熱狂的に若い学生たちに歓迎された。多いものは十数万、少なくとも三、四万は売れるのです。出版物で初版二〇〇〇部売ればよし、再版四、五〇〇〇部売れば成功だという時に一桁多く売れた。戦後、リベラルな思想家の人たちが『学生叢書』を読んだという人が多いと聞いた。それが部数として最も多く売れたでしょう。

美濃部達吉の憲法の本に国体明徴運動の圧力がかかる(一九三五年三月二十三日衆議院国体明徴決議案可決)、河合が起訴されることが相次ぎ、そういう中で多少とも進歩的な出版物は何だらうと考えた。私は日本評論社は土方、河合的な反マルクス派の出版社として有名だから、逆手を考えマルクスの『資本論』を出そうと思ひました。どこもそんな危険な出版をしない。という事は、毎年毎年経済の学生が『資本論』を読もうとしても市場には見つからない。思ひきつて、社長を焚きつけて『資本論』を出そうと提案した。私が検挙されても、数年間潤沢に『資本論』が溢れるようになれば、それは意義があると思つて。反共でコチコチの社長が五、六万売れるのならやれと言う。つまり、儲けておいて私を警視庁へ差し出せばペイすると、そう思つたのでしよう。それで

捕まっても、その方がプラスが多いだろうと考えた。五、六万じやなかったと思いますよ、一〇万近く出たのではないかな（一九三七年五月第一巻上巻、同年十一月第一巻下巻発行）。長谷部文雄の名前で出していますが長谷部さんは第一巻だけで、二巻、三巻の原稿を作ってくれない。一方警視庁では、こんな奇怪なものをと、一週間に一度私を呼びつけ「資本論」をやめろと脅かす。こっちはクビをかけているのに、長谷部さんがやらないから困った（第二巻以降の原稿）。ある日長谷部さんの使いで、大学で同級の小説家阿部知二君がやって来た。「君、長谷部の続きの原稿を持ってこなければ、もう『資本論』の発行を断念すると言ったそうだな」と。「出さなければならぬから、私はやっているんだ。原稿をくれないから、止めるしかないんだ」と答えた。それで、「止めなくすむように陸軍省の森局長が、統制経済研究をする上でマルクス『資本論』は有用だという主旨の推薦文を書いてくれるから、それを内務省に持って行き、それで長谷部の遅れている原稿ができあがるまで待ってくれ」というのです。私は、「森さんの推薦文をあなたにもらわなくても、よく知っている。だけど日本軍国主義の代表者にマルクスを推薦させるのは、マルクスに対する最大の侮辱になる。君の言うことはおかしいよ」と言いました。阿部君は本当は進歩派なのです。阿部君の奥さんと長谷部さんの奥さんは姉妹で、頼まれ仕方なしに来たみたいで、頭をかきかき帰って行った。

満鉄時代

日本評論社の鈴木社長が、私の動静を全部当局に通報していた。それと部内で私と懇意な人の中に、社長と別に私のことを内務省図書課に密告している人がいることがわかった（一九三八年頃社内二重の通報者）。もう今の時世で進歩的な出版を続けることは難しいと考えた。身辺が危ないし、「資本論」企画の報復があるだろう。それで二、三年前から満鉄調査部の中学同級生大上末広が、来ないかという誘いがあった（一九三八年七月満鉄東京支社で資料課員の辞令交付）。日本にいれば三、四年のうちに検挙される。満州に行けばそれが四、五年伸びると考えたが、これはちよつと計算違いでした。一つ馬鹿な話で、私は戦争に負けると思ったが四、五年先とは思わなかった。大上の計算によると、初任給いくらで五年間勤めると、五年目には退職手当が二〇〇〇円になると言う。東京の郊外の小さな文化住宅が二〇〇〇円で一軒つくれる位で、私は退職金二〇〇〇円で日本へ帰り、その時にその後を考えよう、と。状況が困難で、それを逆手にある程度やれたけれど、そういうままでできるものではない。満鉄に鞍替えしたのは虫のいい誤算で、戦争に負けると思いながら、そこから退職手当をもらって帰るのはどこか矛盾します。そんな馬鹿なことは、実行できなかつた。ちよつと四年目に検挙。続いて敗戦で、退職手当どころか社内貯金なども全部と

られてしまった。

日本帝国主義の最前線であり、関東軍直属のシンクタンク機関満鉄が、なぜ私のような前歴者を採用したか。本来なら、共産党崩れなんかをば採用するはずがない。しかし、私と同じような経歴の者が割合に多い。今までの経験主義的な満州経済ではなく、計画的に満州の経済を考える人物を多くおかないと関東軍自身の展望がつかめない。大体わが国には、調査研究の専門家がいません。マルクス経済学の素養のある者なら、国民経済の全過程を観察することができまます。経済調査マンの代行者になれそうに見えたと思います。そういう必要から意識的に集めたと思うのです。そのなかで、異彩を放っていたのが具島兼三郎君なのです。具島君は、同志社大学あたりで反ファシズムの理論家でもあるし、民主主義運動の闘士でもある。私より一つ若いのですが、すでに青年にして名士なのです。反ファシズムの代表的闘士を軍部ファシズムの関東軍が採用したわけではないでしょう。これは、私の独断ですが、調査部長田中清次郎さん（夏目漱石「満韓ところどころ」が大リベラリストなのです。おそらくこの田中部長が、具島君に着目し呼び寄せたと思うのです。しかも、反ファシストの理論家として意識的に彼を重視した。

例えば昭和十四年「満鉄調査月報」編集部に具島君がやって来て、「物資戦略と外交政策」というのを書いたから載せてくれという。これを内地の『中央公論』や『改造』でやったら、反戦反軍で捕まる。「満鉄調査月報」は満鉄の出版物

で、関東州内の検閲機関が担当するはずで。ところが満鉄自体が国家機関ですから、検閲の対象にはならないのです。私の同級生下級生みたいな者がやっていて、満鉄に一切手出しをしない。だから、「満鉄調査月報」は出版法に引っかかったことは一度もない。ところで、具島論文の内容です。世界的に第二次の世界戦争が迫っており、枢軸関係とABC陣営を比較し、ABC陣営内に近代総力戦争を遂行する資源と生産能力があり、対立する枢軸三国を比較すると、戦争遂行に必要な殆どの資源と生産力はABC陣営に集中しており、枢軸三国に殆どない。仮にあつたとしても、枢軸国の資源を日本まで運ぶとなると全部ABC陣営の海軍の支配水域を通らなければならず、あるいはシベリア鉄道、日本軍国主義の最大対抗力のソ連を貨車で通過しなければならぬ。これだけの条件を考え、近代国家の総力から遂行する建前からすれば、日本はABC陣営に属すべきで枢軸関係では戦争ができない、という研究主旨です。これを田中部長が読んで、大喜びをした。具島に書かせれば、そういうことを書くと部長が予想したと思うのです。そして特別出張で旅費と添書をくれ、この内容を日本政府や軍部機関に話して来いという。満鉄調査部の田中部長を中心とする調査部内のリベラリスト集団が具島君を採用したことは、最初から日本の軍国主義に対する理論的対抗力として彼を抜擢したことになる。これが具島君を見る場合、重要な第一点です。

第二点は、「支那抗戦力調査」（一九七〇年三二書房復刻版

発行)。これは満鉄だけでなく日本軍部としても一つの転換点を示す。具島君は、調査部中枢の総合課の職員でした。出先の調査機関を調整するイニシアティブを持った課です。上海事務所に中西功がいて、職員としては末席だけれども知識や調査能力は抜群。また東京支社には尾崎秀実がいて、中国共産党関係をよく知っていた。尾崎、具島、中西、この三人のコンビがうまくいったのが、「支那抗戦力調査」。この基本的な方針は、毛沢東の「持久戦を論ずる」という論文です。

「論持久戦」という論文の科学的分析に基づいて、重慶政権の国民政府にどの程度の戦闘能力があるかを各部門別に詳しく調査したのです。その結論は、内外の諸条件を総合すると国民政府軍は日本軍と戦うだけの力を持っている。逆に言うと、日本軍は国民政府軍を軍事的に圧倒する可能性はない。

そうすれば軍事的ではなく、今度は政治的外交的に重慶政権と取り引きをし、これ以上の戦争拡大を阻止するしか方法がない、という結論でした。一語で言えば、中国から日本の全軍を撤退させよ、と。そうしなければ、蒋介石が外交交渉に応じない。そのような結論を調査部が単独で出し得るか、ということです。本当は軍自身が中国大陸における戦争は、軍事的に行き詰まったと知っているが、戦争を始めたのは軍なのだから、今さら軍としては戦争をやめようとは口が裂けても言えない。満鉄に調査させて、この結果が出たから仕様がないと判断したと考えられないこともない。満鉄の上海事務所と南京支那派遣軍総司令部（南京総軍）には微妙な何かが

あって、形の上では満鉄調査部がやったけれど、それを一番期待したのが軍である、という関係があるのだらう。そういう重要な仕事の一部分を具島君が担当した。このことは、具島君の第二の功績と認めなければならぬ。

吉林の社会科学研究所が、六〇年近く経って初めて満鉄調査部を評価した。一番注目したのは、南京総軍があの調査を重視して軍用機を出して、重要政治機関、軍事機関に報告者を派遣していることです。あの調査自身が、毛沢東の言葉をかりれば、中国革命に対する大きな援助になったのであり、その代表者である尾崎の言っている言葉まで出して、尾崎の言葉を引くという結論です。初めて中国が満鉄調査部の仕事を公式に承認したという重要な文献です。具島君を欠いたら、あれほどうまくいかなかったでしょう。あの人は、国際的な世界政治論の立場から、「支那抗戦力調査」をまとめる力量を持っていた。

満州事変を起こした石原莞爾の計算では、満州はとる、しかし満州の重工業資源で国防国家を建設し、日本と満州の結合によって世界最終戦争、ソ連をたたくさらにアメリカをたたく、これで世界戦争がなくなるというものであった。世界最終戦争を実現するために満州国にとどまって、中国本土に対して絶対に戦争すべきではない、少なくとも向こう十年間は中国本土で戦争すべきでない、というのが石原参謀によって代表される日本軍部の国防計画でした。日本の軍部にはその勢力だけではなく、満州一國だけではなしに、満州国を

守るためにその背後華北五省を日本が軍事的に占領する必要がある、という板垣などに代表される勢力がある。さらに、中国全土を占領しなければならぬという東条によって代表される勢力もある。これは、ゾルゲが言っていることです。日本の軍部は、石原莞爾派、板垣征四郎派、東条英機派と三つのグループに分裂し、この間の調整がないままにそれぞれの軍が勝手なことをやりながら相手を認めるという曖昧な性格を持っていた。盧溝橋事件が、昭和十二年に起きます。その時は、板垣征四郎的な武力のイニシアティブで、もう石原莞爾は軍部の中枢には認められない。それで、石原の計画はおじやんになった。中国本土に戦争を拡大するグループは、その年のうちに蒋介石が屈服すると考えた。極めてあまい主観的な判断で、戦線が拡大する。日本軍と国民政府軍、その背後の共産軍との力関係を分析したのが毛沢東の「持久戦を論ずる」。それを見ると、日本は最初は優勢に見えるが次第に日本と中国の力が拮抗し、割合早く日本が劣勢になり、逆に中国軍の方が日本軍を全滅させる時期が来る、と。そのために、どういう条件が必要かという研究なのです。結局日中戦争は、毛沢東の予見した通りになる。その状況のなかで「支那抗戦力調査」は、軍自身のおそらく板垣的なグループの軍事集団の利益を代表するものだと思います。そのことを田中調査部長や具島君がどこまで知っていたか分かりませんが、今日からみると、南京総軍的な要求を巧みにとらえた具島君であった。これは調査機関の一調査員ではなく、国策的な非常

に高邁な考えであったと思います。逆に言えば、日本帝国主義の自己矛盾を逆に利用したのも具島君だった。反ファシズムの一つの契機として、彼の行為は「支那抗戦力調査」に具体化し、日本の戦争を軍自身の手で中断させる目的であった。そういう点で、具島君を評価すべきだと思います（満鉄調査部第二次検挙・一九四三年七月十七日早朝石堂を憲兵隊検挙・四五年五月一日新京の法院で執行猶予判決・同年五月十七日召集令状・四一歳）。

中野重治との関わり

横手 中野重治の父藤作に興味があります。藤作は、土地の測量技術などの近代的知識の一端を持った職能者であったと推定するんですが。

石堂 何かそういう記録がありますか？

横手 無いんです。しかし、例えば煙草栽培に関することとか、朝鮮土地調査とか。

石堂 私もそうかと思っていたのですが、「吉野谷村小百科事典」（一九九〇年十月吉野谷村役場発行）をご覧になると、こんなところに測量だけで長年勤めている理由がないでしょう。むしろ一般事務員じゃないかと思えます。何でもやらす電力会社の吉野谷の出張所に何年かいたんですから。朝鮮でも何やっていたのか。農業指導員みたいなことをやっていたのではないかと思ったりしますが、よく判りません。

横手 兄の耕一のことについては何かご存知ないですか？

石堂 この人の日記帳を見ました。これは、中野の遺族が持っているとします。克明に書いて真面目な勉強家で、東大の法学部を卒業した時は全体の三十番目くらいの成績ですから、まずまず良い方でしょう。朝鮮の銀行に勤めて、腸チフスカ何かで死んでしまいました。それが芸者を落籍して、結婚します。その女性はその後非常に不幸な目にあつて、中野の作品にその人のことがチョイチョイと出てきます。しかし、具体的な話を聞いたことはない。

横手 打方新之丞が読んでいた本をご存知ないですか？

石堂 打方君は、人間の心の中を良く見ることができるとして。また、中野君と違つてもっと倫理的な人でした。作家としての感性が非常に優れた人で、中野は心中、打方君という人を畏敬していた。私は、一年程度一緒に住んでいましたから知っています。打方のことは中野はあまり語りませんが、もし長く生きていたら、優れた、中野とは違つた型の芥川の作家になつたと思います。二四、二五歳で死にました。どこか肉体的な欠陥があつて大成しなかつたけれど、非常に惜しい人だつたと思います。日本のこれまでにあまりない型のストリングベリーのな人になつたかもしれない、そんな感じがする人です。中野は最後までこの人に対しては畏敬の念を持っていたと思います。

横手 中沢直吉という人についてはいかがですか？

石堂 中沢君は、打方君とも違つてもっと心情主義的でした。

た。類稀な感性を持つていた。人間の心理を表現するのに、ある人は理論の形で表現し、ある人は道徳論的に表現する人もあるでしょうし、中野は感性によつて表現した人だと思ひます。中野は、感情的作家とだけ言つてはいけません。美しい感性をもつて人生を描くことができています。それは、思弁の形とか論理の形ではなくて、感性の形で表現した人だということ。

もう一つ日本の社会主義は、後進国的な日本資本主義が発展するわけですが、西欧の資本主義に比べてきわめて劣勢にある。その劣勢にある立ち後れをいかに克服するか、という国民的課題があつたと思ひます。それを日本の場合は、内的な成熟がそこまで来ていないために、主として激烈な感情的な表現によつて歴史的後進性を克服するという必然性があつた。そのため、日本の社会主義運動が感情的社会主義をとつたと思うのです。それは、今日まで。従つて極めて論理性に乏しい社会主義。日本のプロレタリア文学運動もその反動を受け、他の国の社会主義文学に比べて極めて心情主義的であつて、中野はそこに代表される作家だと言えます。例えば彼は、レーニンを非常に愛しました。その場合、マルクス主義の原理が非常に遅れた農民國ロシアで、どのようにして発展したかということに興味を持つていたと思う。それを論理の形で表現することより、「レーニン素人の読み方」をご覧になるとわかりますが、決してあそこにはレーニンにおける理論の特性は描かれていない。むしろある時には、農民的

なレーニンがロシア資本主義の現実をどう感じたか、そっちの方により多くの興味を持っていた。その意味で、中野のロシア好きは神山茂夫の影響が非常に強い。我々が西欧主義的に考えようとする問題を、神山的な日本ナショナリズムで考えるところがかなりあった。そういう意味で、西欧的な引力と日本的な引力との間の交錯点において、その矛盾を心情主義的にとらえた、という特徴があったと思う。これは欠点でもあり、同時にまた彼の文学の特徴でもあった。その文学はベストセラー的な支持は得られなかったけれど、ロングセラー的な作家として成功した。持続的に愛される、日本人の国民精神の中心構造のある側面を中野は代表しているように思われる。

それとシルババーグが書き替えたね (Miriam Silverberg, *Changing Song*, Princeton University Press, 1990)。その本が出た時、小田切秀雄君が亡くなるしばらく前ですが、不自由な体でここに来てくれました。別れに来てくれたんだと思う。小田切君が、その本に非常に憤慨していた。その時にもいろいろ話したのです。シルババーグにはそこまでの意識があったかどうか判らないけれど、マルクスが「聖家族」の中でフランス人が政治的実践で行ったことを、フランス革命のロベスピエールのような社会主義的行動は、歴史的発展段階を経ないドイツでは、カントやヘーゲルのような観念哲学の形でドイツ語で表現している。逆に言うと、イデオロギーとして、イギリスでは、ブルジョア経済学の形で表現している。

イギリス国民経済学的な見方ですね。一八世紀から一九世紀のそれぞれの国の特殊な資本主義を、それぞれ民族的な特徴が異なり、ある時は哲学で、ある時は経済学で、社会主義で表現する点において、同質の実態をそれぞれの側面から、フランスの政治理論はドイツの観念哲学に翻訳することができ。逆にイギリスの経済学は、ドイツの観念に再翻訳の可能性がある。そういう一つの試みとしてシルババーグの仕事を目に見てやることはできないか。彼女は中野の心情の文学として、女の髪の毛の匂いをうたったけれども、それはある意味では、プロッホ、プレヒトなりベンヤミン、グラムシなりが描こうとしたものと同じ実態に対するそれぞれの接近の方法であって、彼女は中野の初期の詩作を近代の言葉に翻訳し、全体的に日本の女の人の優しさ美しさ、草花の美しさをうたっている。同時にそれが、日本的な現代資本主義の別個の表現であることを考えている。その努力が成功したかどうかは別であり、彼女のアプローチは世界文学における中野を評価しようとした試みとして、許してやるべきではなからうかと提案した。小田切君は、やや怒りを納めて全面的に賛成ではないけれど、といって帰って行った。それが彼との別れになった。萩原朔太郎は、同じような傾向の中野に対して、中野の詩は情緒が強すぎると言う。大西巨人は、中野の文学には詠嘆が多くて、論理性がないと言った。それらは、そういうことだろうと思います。それは大西巨人には、彼自身の文学の原則みたいなものがあって、それから見ると

中野はそう見える。その意味で、プロレタリア文学はいろいろな花を咲かせた。それぞれの花は違うけれど、その特徴なり欠点なりとして断定する前に、日本文学がどのような形で花を咲かせようとしたかを現象として見た方がよい。中野が、幾世代にも渡って読者を絶やさないとすることはそういうことがあるのではないか。我々が、中野文学に惹かれるのは我々が古い日本を背負っている限り、忘れられることができないものがそこにあると思います。そういう側面から、シルババグは必ずしも成功していない。世界文学における中野の作品を、どういう角度でとらえるかというもう一つの課題が残っている。国民的な作家としての中野を、もう一度考え直すことができそうな気がするんです。ちょっと、もう無理かもしれないけれど。

横手 中野は、文学的端緒と転向した時に、林房雄との関わりが強いと思うのです。まだここはハッキリしてないので、転向した直後に林房雄と小泉三申の別荘に行つて、文学的再出発をしていくような形で、中野と林房雄が年譜的にクロスする点があるというのは、もう少しハッキリした方がよいのではないかと考えています。

石堂 私はあまり林を尊敬しない。稀代の才人だけれど彼の思考力というのは、極めて浅い。福本主義が、一時流行しますね。林は、もうお手上げなんです。中野は、ある時期に福本主義であつた時期があります。消化し吸収しあるいはそれに抵抗し、そういう力があつたけれども、林にはそれが無

かつた。無いもんだから、後は体制に押し流されて、いつの間にか判断を誤つて、反動的な大東亜戦争肯定論者に転落する。今日、中野の転向に対抗できるのは、非転向で通した宮本頭治君が一つの模範としてあるわけです。宮本的判断で言うると、日本の共産主義者の殆どが転向していることになる。転向しなかつたのは宮本はじめ何人しかいない。蔵原でさえ満期になつて出獄しています。十年の刑を終えて満期で帰つてきた。しかし本当に革命運動を放棄していないなら、政府は満期になつても釈放しないで保護監察所へ入れて政治的自由を与えなかつた筈だとし、蔵原に与えられたことは、満期になつたことが一つの条件ではあるが、権力に対し何らかの屈服した心証を与えたがために家に帰ることを許された、という。私の友人で、砂間一良というのがいます。十年の刑を終えて家に帰り、戦後党に復帰し静岡県議会で大活動したけれども、何年経つても中央委員にはなれない。私のところによつて来て、男泣きをしていました。自分は転向した覚えは少しもないのに、出獄したばかりに宮本は転向と認め中央委員にしてくれない。本当に大泣きました。私は中央委員つて泣かなきゃならない程たいしたものではない。子どもが、兵隊ごつこの時にビールのキャップを勳章につけてるのと同じもので、本当の意味で人間として政治家としての価値証明にはならない、と慰めたのです。結局、中央委員になり、最後に党を代表して北京に駐在したりした。そういう格付けがあるんです。転向は、敵に屈服し降伏した品性劣悪な人間、

道徳的な欠陥者だとすると、戦前転向した人は、仮に三万人あったとすればその三万人は皆欠陥者だということになる。戦前の共産党は国民のうちの優秀な分子を党員に採択したのではなく、人間的欠陥者を集めたことになり、自己否定になる。なぜ多くの人が転向したかを別の側面から見なければなりません。

コミンテルンを無条件で支持した日本共産党中央委員会は、現実不可能な課題を国民の前に提示した。例えば天皇制廃止ということ。ところが、天皇制廃止ということが実現可能だったなら、一般的にモナルキーというのは、デモクラシーと相反するという点では誰だって天皇制に反対しなきゃならんけど、日本における天皇制とは具体的にどんなものか、これをどんな風にすれば廃止したことになるか。一人ひとり党員に聞いてみると、皆、違うことを言う。具体性のない象徴的なスローガンだけで具体的な歴史的なプログラムがない。コミンテルンの党を無条件に信用して、天皇制廃止のスローガンを支持すると言っただけで、治安維持法の第一条に引っかけられる。天皇制廃止という戦術で失敗するのは丁度、日露戦争における乃木將軍が旅順の近代的要塞に対して、歩兵の白兵戦で対抗したのとよく似たところがある。旅順で乃木は無駄な攻撃を繰り返し、かつてない四万六〇〇〇の死傷者を出した。白兵戦によってではなしに重砲を備えることによつて、二〇三高地を攻略することができた。天皇制攻撃に対しても、白兵戦的な攻撃の方法の失敗が明白ならば、正面攻

撃に変わって迂回作戦を考えると、他に代わるべき考えを入れるべきであった。抽象的スローガンを具体的な設計方式として考えなかった点では、それぞれの人が政治的責任を負わなければならぬ。従つてそこでは、歴史的課題を実行可能な言語に翻訳すれば、どうすることであるかをもっと明確にしなければならなかった。現にあのスローガンは正しかったとするならば、歴代の党員数は増えるはずだけれど、天皇制廃止のスローガンの下で三・一五より四・一六は減るといったことばかりで、最後には袴田一人になった。医者の方箋に例えるなら、そうやって病気が快癒したなら名医と言えるが、その処方箋を服用した者が皆死んでしまったら、やぶ医者と言わねばなりません。裁判闘争も一つの戦術であるけれども、共産主義者の品性を表現する普遍的基準にすることはできない。

私は戦争末期に中国の共産主義者と接触して、戦争が終わり日本に帰ったら何をやるかと聞かれた。私は、戦前の共産主義者の大半の者が、現実的には君主制廃止という党の最高スローガンを放棄し、その結果全員が戦争に参加するようになった。それは何でそうなったかを国に帰ったら、もう一度共産党幹部と相談しようと思つたら、意外なことにそれはつまらんことではないか、という。できないことを言つただけのことではないか。日本人は「資本論」の研究なんかは優秀だけれど、政治にかけては全く赤ん坊だ、と。自分たちは政治スローガンを決定する場合には、一定の基準を持

っている。少数の例外的な優秀な前衛の眼ではなしに大衆自身の眼から見て、ことを決しなければならぬ。従って一定の政治的スローガンを考えるならば、まず大衆の目線を見て、それが道理に叶っているかどうか、それが有理ということ。それだけでは不充分で、そのスローガンを採用することで運動が拡大し、あるいはやり方が楽になる。つまりプラスになるか、利益になるかどうかを前衛の目ではなしに大衆の目線で、この指示に従うことの方が有利である。それだけでは未だ足りない。最も政治的なのは、仮に道理に叶って利益になる運動であっても、だからといってむやみやたらにやるのではなしに、実際に節度というものがある。どの程度までならやれるを大衆自身に判断させる。その三つの条件が実現した場合に、政治的スローガンとして提出すべきだ、と。天皇制廃止が本当に有利有節であったなら、ああいう形では出てこないだろう。それで日本に帰ってから、野坂氏に会ってこの有利有節は毛沢東も使った言葉でもあるしね、と言ったら、そんなことはどうでも良いではないかと、とり合わない。志賀にも話したけど、志賀もあくまでもコミンテルンの言っていることが絶対正しいと言う。しかし、正しいという証明はどこにもない。信じているだけ。信じているだけなら、天孫降臨を信じるのと同じことで、科学的ではないではないか、と。

考えるうちに、劉少奇が書いた本を見たんです。それは、昭和十二年に関東軍が華北五州を第二満州国にするために華

北省へ進出して、ありとあらゆる挑発をしたことがある。その時に、華北省の省民は憤激して抗日運動を起こした。抗日運動は広まるけれど、これを組織し指導する中堅幹部が皆国民党の監獄に入れられて、幹部不足なんだ。中堅幹部、党の最高部と大衆とを結びつける中堅幹部がいないと運動が発展しないから、この中堅幹部をどう敵から取り戻すかということが課題になった。その時に、北京に当時の幹部ばかりを入れていた監獄があった。そこにいる同志を取り戻す必要がある。いかにして取り戻すかということが大問題で、国民党は一方で過酷な弾圧をやって、しかもめぼしい者を殺戮する。

それだけでは追いつかないので、日本で言えば官製転向戦略がある。共産主義を捨てて、三民主義に賛成すると申告し署名捺印すれば、幹部であっても許される。劉少奇がこれを利用して帰ってこいと獄内の同志に知らせる。この同志達が日本で言えば何年も非転向で頑張つて、今さら革命家としての名譽を汚すことができるかと応じない。当然ですね。そこで劉少奇は考えて、共産党の最高幹部が未だ毛沢東ではなくて、張聞天が総書記なんです。この人に了解を得て組織部長と相談して、その組織部長柯慶施が党の正式の決定として手紙を作成した。その手紙に、「我々はこの手紙を出すに当たって、まず諸君が長すぎる程、長い間逮捕されていることを考えている。ところが今は諸君が活動している時代と違って、情勢が一変して抗日運動は大衆運動に変わった。従って情勢が変化したように、任務もまた変わる。一日も早く諸君を呼び戻

して、新しい情勢に適應した運動を展開するのが党の任務になつてゐる。だから諸君に改めて「反共啓示」署名捺印することを求める。しかし出獄後、党は差別待遇をしない。諸君が転向したと区別しない、組織上も差別しない。そのことは党が正式に保証する。だから早く出てこい。それでもなおかつ、監獄に留まるのであれば、それは重大な政治的錯誤である」と書かれていた。そうしたら、中にいた同志がひよつとしたらこれは本当かもしれない、と。仮に何人かやつて出てみて、本当だと判つたならば鶏の丸焼きを差し入れるから、鶏の差し入れがあつたら第二次、第三次と皆が出よう、と言ひ合つて第一次に出たのは、優秀な幹部が六人か七人か出た。出てみたら、正式な党の決定だと判つたから、安心して差し入れをする。その年のうちに七一人出たのに、四人は判らなかつた。二人は本当の意味での国民党员になり、共產党に戻らなかつた。あと二人は生死不明というから、どこかで消されたのではないか。その他の人は、全員が党から新しい任務をもつて、各地で活動して大功績をあげ何人かは第七回大会の代議員に選出されている。日本は中国ではないから、そのとおりのことができたかどうか判らないけれども、そうした政治的選択をすべきであつたと思う。このことを、「中野重治の転向再論」という短い論文に書いた。それが、鶴見氏らのグループの目についた。石堂の言うことはもういつペン検討する必要があると言つて、この本を作ってくれた（鶴見俊輔他「転向再論」二〇〇一年四月平凡社発行）。

横手 今GHQ/SCAPがアメリカに持つていつた戦前の資料を調べています。その中に一部マイクロで帰つてきた資料があります。その中にいろんな資料がありますが、内務省警保局が作った内部文書や極秘の文書がありまして、そこではキチンと転向の規定をしている。その特高の資料には、準転向という規定もあります。その規定から見ると、転向というのは極一部。最後の最後まで共產主義を捨てないのが非転向であつて、それ以外は殆どが準転向なんです。そういうふうな当時の特高の規定からすると、言わば、今までの転向、非転向という枠組みを私たちが誤解していたことになる。

石堂 内務省自身の規定が変わつてきたと言へる。けれども、最終的に東条は、完全転向というものを含めて全部捕まえてしまへとしてゐる。そんな人間が三万人くらいいる。敗戦が近づくとその三万人は必ず革命運動を起こすと言うんです。だから今のうちに、日本社会主義革命の種を絶滅しなきゃならんから捕まへよ、と。横浜事件とか満鉄調査部事件は、そのための人数合わせの事件です。これが政府の政策。内務省の規定は過渡的で、最終の結論は東条のところに行きます。彼ら自身、転向というのは官庁の便宜で作つた名前前で、実際に共產主義者を捕らえてみて種々様々の反応を示す者を、どう分類して良いか本質的な分類はできていなかった。転向と言つてもあんまり信用しなかつた。自分たちが作つた規定にだんだんあてはまらなくなつてきて、準というものも作つたんでしょね。

天皇制廃止というスローガンを支持しますと最後まで頑張って、刑務所の中で腐って行く。出る見込みはない。これは、政治的に正しいかというところではない。そういう連中も呼び戻さなければならぬ。呼び戻すためには、政府の全権力の前に頭を下げて屈服した形をとつても差し支えなかった。しかし、帰ってきた人を中国なら国が広いから、北京でやられた人間を広東にやることができる。日本は地域は狭いけれど分野は広いんです。過去の労働運動でくじつた人も、今度は別の形の文化運動に持っていける。別な大衆芸能運動に持っていく。そういう分野は中国に比べて幅が広いから、新しい任務を授けて具体的に配置するというのが必要だった。しかし、いよいよ敗戦がせまると、いっそのことを全部ひっくり返して捕らえてしまえ、と。天皇の詔勅でなしに、国民の大衆行動か内乱のような形によって敗戦になったら、刑務所から出さないで、その三万人は皆殺されたらと思う。私も殺されると思ひましたよ。殺されなかったのは、天皇の詔勅という形で敗戦になったからなのです。その時には、全部ひっくり返して殺したと思う。そんな意味で転向問題は研究も必要だし、見直す必要がある。日本の現状によって階級闘争の現在の勢力配置から見て、運動が拡大するかしらないかということ。

中野の転向小説に出てくる党活動をご覧なさい。大衆との接触が何もない。せいぜい苦勞に苦勞を重ねて一週間に一回会合をやつて、上部からの指令を受け取つて、それでお終ひ。

大衆運動はどこにもない。組織を維持するだけの運動で、どこを見ても革命運動だなんて高尚なものではなくなつています。それによって参加する人達が増え、増えるだけではないに、その闘争の質が高まり拡大することです。病人で言えば、病気が治ること。健康を回復することです。日本の場合には、病状が悪化して皆死んでしまつた。これはコミンテルンなり、共産党が根本方針を誤つたからです。つまり天皇制廃止という最高スローガンが実際には、実現性のない有害なる破壊的なスローガンであつた。横川次郎君という親しい友人がいるのですが、周恩来に可愛がられて戦後、中国で客分になつて中国で死にました（一九九一年十一月勳章書房発行「中野重治と社会主義」二二八頁）。中国共産党の黨員にもなつて、かなり周恩来夫妻はこの横川君を大切にした。横川と私が文通をした結果は、コミンテルンは天皇制廃止のスローガンを日本共産党に与えたのは、日本の運動にプラスになるためではなく、天皇制廃止で日本国内が動揺すれば、日本の対ロシア侵略を弱めることができる。いわばロシアにとって有利な、日本にとって不利な民族利己主義的なスローガンである。それによつて党は、無くなつてしまつたではないか。転向問題は、一九三一年以後その段階で日本の共産主義運動はどうしてはいけなかつたか、他にどうすることが可能であつたか、戦争を拡大しないように、止めさせるようなところまで持つていくような任務、そういう大衆運動を起さなければいけない。そうするためには抽象的スローガンを並べるんじやなしに、

もつと具体的に、これこそ我々の要求だと国民が信じるような、有理有利有節の行動を取るべきであった、というような観点から見直されるべきことです。

横手 西田信春の資料をお送りしました。一九四四年か四年五年前くらいに、もう一回共産党員のリストを特高は作り始め、そこに西田の名前があった。九州で殺されたことは東京の情報としてキチツツとしていなかった。資料では、行方不明と記載されています(旧制一高東京帝大に進み新人会で活動・石堂さんと二年間共同生活・共産党九州地方委員会を確立するため福岡に行き三三年福岡県警で拷問を受け三〇歳で虐殺される)。

石堂 当然検挙して、監獄に入れなきゃならんけど、監獄に入れてもいいない。どこに行っているのか判らない人間が何人かいる。逮捕してない人間も書いてある。最近、あの本の補充になる材料を発見した。一つは九州の飯塚警察署(中丸又市警部)が使っているスパイが、西田が選んだ九州中央委員の労働組合部長(笹倉栄)なんです。その報告書類が全部出てきた。

横手 ああ、そうですか。

石堂 あの本には誤植もあったし、誤植を訂正した文書もある(中野重治・原泉・石堂清倫編「西田信春・書簡・追憶」一九七〇年一月土筆社発行)。中野がまだ刑務所において、原泉さんが下で休んでいて、二階に西田が住んでいて、私が一カ月くらい一緒にいた。一九三三年の七月四日から三十日まで、そこに居た。原さんは知らないんです。二階と下で何の関係

もなしで暮らしていた。その後の中野に手紙を出します。西田の書いた手紙が発見されて再録しました。その中で重要なことは、最近農民運動における新しい傾向として、農民委員会のことを書いた作品を読んだら涙が出てきたということを書いている。その時の農民委員会の要求は、小作料の減免を中心とする経済闘争だった。それが世界農業危機で地主達も経営が困難だ、規模を拡大する以外には経営できなくなつて、一斉に地主達が小作地を引き上げる。小作人は土地を取り上げられて困るから、今度は小作料の減免だけではなしに土地所有そのものに対し、一切の小作地に対する反対という土地改革要求が、農民運動の現実から出てくる。その組織として、農村に農民委員会を設ける。農民委員会は、将来の一種のソビエトになる。土地革命のためのソビエト機関として考案された。それが手紙に農民委員会として出てくる。三二年テーズを実現する過程で模索しているけど、残念だけどその時の党は、最高部はスパイMが握っている。最高の党指導部をスパイが握っている時に、その党に対する裏切りを致しましたというような告白は客観的に意味があるかということです。

中野がね、二審で降参して、これから政治運動をやりませんかと書いているけど、その時も彼が属している文化運動のなかのフラクションのその上を握っているのもMです。

横手 石堂さんの本に、敗戦期のGHQ/SCAPのことがありますが(一九九〇年十月勁草書房発行「続わが異端の昭和史」一〇頁)。具体的に教えてもらえませんか？

石堂

この時、党本部細胞委員でその会報発行の責任者で

した。事務的に党員の身上書を一月に一回、毎月二通綴つてGHQ/SCAPに提出する。これは、党本部だけではなく全国でそのようなのです。こんなことをすれば党の全容をGHQ/SCAPに握られてしまうから、それに対する抵抗運動を始めたんです。何のかんのと口実をつけて、私が委員の間は個人情報に関する提出書類を作らなかつた。作る振りをして提出しなかつた。その時に党はGHQ/SCAPとの取り引きで、党の存立を認めてもらう代わりにこのような要求を受け入れていた。そのうちレッドパージが全国的にやられた(この名簿によるもの)。大切な党友に至るまで人的情報をGHQ/SCAPは握っていた。共産党にGHQ/SCAPと正面衝突する力はないけれども、その抵抗の方法を考え、できない要求にまで唯々諾々と従う必要はなかつた。その妥協的役割を果たしたのは、野坂だと思ふ。野坂の使いをしたのは伊藤だと思ふ。野坂は最初のうち伊藤を使つたんです。途中からロシアに疑われて止めた。後日北京機関にいる時に、どうも自分達が疑われていると野坂が気がついて、自分を助けるために伊藤を犠牲にした。現に伊藤は野坂の命令で党の報告をGHQ/SCAPに持つていっています。それは徳田球一も承認している。党の合法的存立のため、GHQ/SCAPの要求に応じ毎月重要情報を出している。党員の身上書を出すのも同じ要求なんです。GHQ/SCAPに対する態度をもう少し考えるべきだつた。それ程に党とは大切なものか

どうか。党組織を縮小したつて、無くなつたつて、その犠牲は止むを得ない。それよりも職場の核はその手で保護しなければいけない。そういうところで、徳田・野坂時代の妥協政策はアメリカ帝国主義に対して態度を誤つた。組織は後で作れます。しかし、人は違います。私が委員の二カ月間は、誤魔化し、誤魔化して提出せずに済んだ。それでも追いつかなくて、党の中央委員は皆追放されることになつた。

生き方として

横手 石堂さんの生き方は、本を何度も読ませてもらい、例えばお母さんとお別れする場面があつたり、捕まつた時に豆腐を買うぐらいのお金しか持つていなかったとか、拷問で耳がダメになつたり、獄中のハンガーストライキで胃袋がダメになつたり。日本評論社でも、中国に渡つても、敗戦期に帰国する前後でも、凡そ人が持つてゐる欲望とは違ふ所で、石堂さんは何かを見定めながら行動されていると感じます。それが、一つの生き方でもあるような気がします。

石堂 そのように意識したことは、一つも、一度もない。

私は、もともと弱い人間だと思つています。普通の活動家に比べると意志薄弱で行動が強靱でない。そういう弱みを知つてます。豪傑主義に対し、無理な抵抗をしようとは思わない。しかし、その間隙で消極的抵抗をするより仕様がなから、何その消極的抵抗の方法を止むをえず考えただけであつて、何

か先に期するところがあり一貫して何かをやったという、そんな立派なことは何もない。

横手 石堂さんは、例えば学生だった時に卒業に必要な単位はすぐに取って、その後の学生としての時間を、両国の労働者の中に入り一緒に勉強したり。一言で言うところ、いろいろ苦労されて来たのに、という気持ちがあるんです。

石堂 いやいや、そうではなくて、私等の時代は、理論と実践の統一はどういうことかと繰り返し考えていた。そして違った環境に対してどう対応するのか、と。それ以外に、別に高尚な理由はなし。学生運動、左翼労働組合といろいろ経験があります。実際の大衆の動き、現場の運動に対する考慮をせざるを得ない。それでも大したことをした覚えはありませんよ。たまたま敗戦後から戦後、大きな誤りを起こさなかったというところはあるかもしれない。それは、偶然の結果であってね。人から言われたんですが、いついかなる場合でも一貫して反対派の少数派なんです。意図して反対派を考えたのではないけれど、学生運動のなかでもそうだったし、満鉄へ行ってもそうだったし、戦後の多くの接触の中でもそうなんです。何となくちよっとおかしいぞと思うことがあると、それを誤魔化さないと考えてきた。それは受動的なことであって、能動的ではないですね。その程度ですよ。意識して反対派になろうと思ったことはない。運動の中には絶えず無理や誤謬があつて、それに気がついて自分の中で追求した。そんな派手なことをやった覚えはない。あなたは、それを知ら

ないのであつて、これは誤解です。

横手 時間が過ぎるのが早く、もう五時間近くもお話をお聞きしています。石堂さん、お疲れではないですか。有り難う御座いました。石堂さんの元気なお顔を前に、お話を伺うことができました。

石堂 お陰様で、そんなに草臥れませんでした。疑問がたくさんあるでしょうから、遠慮なく聞いて下さい。また、思いついて書きます。

石堂清倫 一九〇四年四月五日、石川県石川郡松任町に生まれる。父は県立農学校獣医畜産学の教員。戸籍上は次男で、姉、弟、妹二人。小学校六年の頃、獣医科が廃止され父は五十歳代で失業。一七年四月石川県立小松中学に入学。家計が苦しく、二年から学用品は知人のお古をもらう。在学中に、理想主義的サークル「春辺会」に参加し、この会で「共產党宣言」の結語「万国のプロレタリア団結せよ!」を独逸語で読む。この頃、高等学校総合入学試験で全国トップになり、四高に入学したと噂される中野重治の名を知る。小松中学四年を修了し二一年四月金沢の第四高等学校進学。四高生中野重治は、髪の毛は肩まで伸び、酒を飲み、着物はポロポロの乞食のようであった、と回想する。この時から、七九年八月二十一日、中野重治の臨終に立ち会うまで六〇年近くに及ぶ交友が続く。打方新之丞を知り、二三年母を失う。二四年東

京帝大英文科入学。二五年七月父を失う。二六年四月森川町の新人会合宿に参加し、西田信春を知り、新人会で活動。二七年三月卒業と同時に関東電気労働組合本部書記。同年十月入党し、新橋烏森の「無産者新聞」(戦前期コミンテルン日本支部共産党合法機関誌)の記者。月給三十円。党は学生運動や労働運動を指導する知的及び道徳的に重い存在であり、ロシア革命はマルクス主義の直接的証明とも考えられていた。

二八年三月十五日、共産党員およびその同調者に対する一斉検挙が行なわれ、東京では三二カ所が搜索され、無産者新聞社本社の搜索を予審判事秋山高彦、検事北条磯五郎が担当した(『現代史資料』16、五一頁)。是枝恭二、門屋博らは当日は検挙を免れたが活動することはできず、三・一五直後の短期間「無産者新聞」編集の中心となった。同年三月三十日松本広治宅で、学生の山根銀二と三月二十六日号の原稿を整理し終えたところを逮捕される(石堂清倫「無産者新聞」のこゝと)、『北方文芸』第一〇〇号)。山形為三警部補から竹刀や鉄の棒での拷問を受ける。三〇年十二月保釈出獄し、三三年十一月第二審で懲役二年執行猶予五年の判決(『転向』)。三四年三月日本評論社に入社し、三七年五月三沢文子と結婚。三八年七月満鉄調査部へ入社し、大連に渡る。資料課第一資料係として「満鉄調査月報」や「満鉄資料彙報」を編集。四三年七月満鉄調査部事件第二次検挙、新京監獄に収監される。四四年十二月出獄し、四五年五月有罪執行猶予判決が下され、招集される。同年ハルビンで敗戦をむかえる。

四九年十月、大連からの引き揚げ船興安丸で舞鶴に着く。品川駅で五味川純平の出迎えを受ける。経済学者堀江邑一の紹介で、党本部のマルクス・レーニン主義研究所(ML)で働く。責任者は中国延安から帰国した野坂参三(後日本共産党議長・九二年十二月除名・九三年没)。MLの党員理論家と政治局との対立が、五〇年綱領草案(徳田綱領)評価に具現。イタリア共産党の構造的改良論を日本に紹介。六一年八月四日、清瀬にある地区委員会に離党届を提出。後日、六二年十一月除名処分との内部文書記録を知人から教えられる。七七年六月運動史研究会発足。二〇〇〇年十一月妻文子を失う。「各人の自由な発展が、万人の自由な発展の条件となるような一つの協同社会」の到来を信じ活動を続ける。

〔編集部追記〕

本稿は二〇〇一年五月二十七日(日)に、長崎総合科学大学平和文化研究所の横手一彦氏が東京都清瀬市松山の石堂清倫氏の自宅を訪問され、「聞き書き」としてまとめられたものである。

横手氏は、「昨年末の、また春先の情況から、精神的にも回復された様子を声の張りに感じた。お話は予定より長時間に及び、それを記録し、後日に文書化して、再度の本人確認を得た」と付記され、はじめ「長崎総合科学大学平和文化研究所」の機関誌に発表されたが、ご厚意によって転載させていただいた。